

第20回
戦争体験を語り継ぐ集い
戦時体験記録集<第15集>

ソビエト連邦国の対日宣戦布告文

一九四五年（昭和二十年）八月八日

ヒットラー独逸ノ壊滅及ヒ降伏ニオイテハ日本
ノミカ、引続キ戦争ヲ継続シツツアル唯一ノ大国
トナレリ、日本兵力ノ無条件降伏ニ関スル本年七
月二十六日附ノ亜米利加合衆国、英国及ヒ支那三
国ノ要求ハ日本ニヨリ拒否セラレタリ、

コレカタメ極東戦争ニ関シ日本政府ヨリ、ソ連
邦ニ対シナサレタル調停方ノ提案ハ総テノ根拠ヲ
喪失スルモノナリ、日本力降伏ヲ拒否セルニ鑑ミ
連合国ハ戦争終結ノ時間ヲ短縮シ、犠牲ノ数ヲ減
縮シ、且ツ全世界ニ於ケル速カナル平和ノ確立ニ
貢献スルタメ、ソ連政府ニ対シ日本侵略者トノ戦
争ニ参加スルヨウ申出タリ、

総テノ同盟ノ義務ニ忠実ナル、ソ連政府ハ連合
国ノ提案ヲ受理シ、本年七月二十六日附ノ連合
宣言ニ加入セリ、カクノ如キ、ソ連政府ノ政策ハ
平和ノ到来ヲ早カラシメ今後ノ犠牲及ヒ苦難ヨリ
諸国民ヲ解放セシメ、且ツ独逸力無条件降伏後体
験セル如キ危険ト破壊ヨリ、日本国民ヲ免ルルコ
トヲ得セシムル唯一ノ方法ナリト、ソ連政府ハ思
考スルモノナリ、

右ノ次第ナルヲモツテ、ソ連政府ハ明日、即チ
八月九日ヨリ、ソ連邦ハ日本ト戦争状態ニアルモ
ノト思考スルコトヲ宣言ス

ところ 緑生涯学習センター
月・日 平成20年7月26日
戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会

発行 刊 の 三三 苺米

緑生涯学習センターで開催している「戦争体験を語り継ぐ集い」二十年目を迎えました(戦時体験記録集は十五集)語り部も少なくなる中、中学生諸君の『語り継いで』いる姿に励まされ感動しています。この冊子が戦争の愚かさや悲惨さを伝え、戦争を美化したり利用する人々の動きを、阻止する原動力になればと願望しています。

目次

戦争中の国民学校	近藤 是	一頁	
祖父母たちの太平洋戦争	服部 真由	五頁	
祖父母たちの太平洋戦争	桂林 伸伍	七頁	
祖父母たちの太平洋戦争	近藤 匠	八頁	
祖父母たちの太平洋戦争	竹下 宏幸	一〇頁	
祖父母たちの太平洋戦争	柘植 厚志	一一頁	
祖父母たちの太平洋戦争	西 剛央	一三頁	
祖父母たちの太平洋戦争	片出 実里	一四頁	
祖父母たちの太平洋戦争	白木 もも	一六頁	
祖父母たちの太平洋戦争	高木聖里那	一八頁	
祖父母たちの太平洋戦争	永井 優歩	二〇頁	
祖父母たちの太平洋戦争	船橋 朋	二二頁	
祖父母たちの太平洋戦争	堀部 智恵	二四頁	
祖父母たちの太平洋戦争	久門 拓	二五頁	
祖父母たちの太平洋戦争	三矢 明宏	二七頁	
祖父母たちの太平洋戦争	浅井奈都美	二九頁	
祖父母たちの太平洋戦争	大谷 香織	三一頁	
祖父母たちの太平洋戦争	松田奈穂美	三三頁	
広島原爆投下と			
沖縄ひめゆり部隊	中学二年生	富田 志織	三五頁
新聞投稿文：広島市民らの無念の慟哭が	橋詰 四郎	三八頁	
広島原爆と被爆者	軍医の記録	肥田舜太郎	三九頁
戦争は愚かなこと	軍医の手記	安岡 隆一	四三頁
生体手術演習の実相	軍医の記録	湯浅 謙	四六頁
新聞投稿文：核の脅威隠し犠牲求めた軍	橋詰 四郎	四九頁	
生死を分かっ数時間	稲葉 迪夫	五〇頁	
血液を提供した報酬	橋詰 四郎	五一頁	
死臭漂う十八分所	井上 龍助	五三頁	
映画「日本の青空」の主人公			
鈴木安蔵先生の素顔と私	中村 幸夫	五六頁	
新聞投稿文：憲法感謝デーGWに制定を	橋詰 四郎	五九頁	
新聞より：戦後日本兵捕虜はなぜ脱走	朝日新聞記事	六〇頁	

戦争中の国民学校

近藤 是

私は名古屋市熱田区花表町で石炭小売と薪炭を商う家庭に、男兄弟4人の末っ子として昭和9年（1934年）生まれ、熱田区伝馬国民学校入学は昭和16年4月（1941年）この年は尋常小学校から国民学校となり、教科書も戦争色の濃い内容になった。小学1年生になる前の昭和12年7月7日（1937年）日華事変から中国と戦争をしていて上海、重慶を空襲したり、爆弾を抱いて敵をやっつけた爆弾三勇士の手柄話や、日独伊（日本・ドイツ・イタリア）三国同盟などがラジオ、新聞に盛んに報道され、軍国主義がだんだん強くなっていた。そして、その年の12月にアメリカ、イギリスとも戦争を始めた。

戦争はハワイ真珠湾奇襲攻撃で始まり、マレー半島などの戦果が華々しく報道され、3か月経った寒い2月15日シンガポールを陥落し、シンガポールを昭南島と命名し戦争に負けるまで日本の領土にしていた。日本中が勝った勝ったの大喜びで、私達も学校から熱田神宮まで日の丸の小旗を歌に合わせて振って参拝していた。そして毎月8日を大詔奉戴日とし熱田神宮に参拝したり、また学校へ通う町毎に近くの神社に集まり、班長さんの命令で並んで列をつくり軍歌を歌いながら行進していた。

勝っていても戦争が激しくなると品物がなくなり、靴下、手袋は贅沢だと無しにし我慢をさせられ、勝った勝ったと子どもなりに浮かれていた小学3年生になったばかりの4月18日昼過ぎ、始めて見る大きな飛行機が低空で新堀川沿いに南へ飛んで行くのをのんびりと見とれていたら、突然その飛行機へ向け日本軍の高射砲がバーンバーンと撃ち、中学生が空襲だと大きく叫んで翼の星マークを指差したのが印象に残っている。この時はさほど空襲されたと思ってもいなかったが、後で分かったことだが、この飛行機は太平洋のアメリカ航空母艦ホーネットから飛び立ったB25爆撃機2機が名古屋を、別の飛行機が東京、川崎、神戸など、日本を最初に空襲して中国へ飛び去っていった。

その頃になると資源も少なく戦争に必要な物しか作らないので、日用品がなくなり、お米や衣料品なども配給制になり、今のよう自由にお金で買えることができなくなった。お菓子や消しゴム、文房具も姿を消し、お金があっても欲しい物が買えなくなり、学校では「欲しがりません勝つまでは」がスローガンになって、我慢したり辛抱することがお国のためだと教えられた。

昭和19年（1944年）になり戦争が段々厳しくなり小学4年生の夏になって、アメリカの空襲があるかも知れないと子どもを空襲から守るため、都市の小学3年生（満8歳）以上、6年生までの児童は親元を離れ田舎の親類へ避難（疎開）さすようになり、田舎に親戚のない人は学校から集団で疎開するこ

とになった。私は親戚が田舎にないので学校から集団疎開に行くことになり、8月暑い日、クラス50名の内39名（全校で630名）が安城の副釜西岸寺（真宗大谷派）（伝馬国民学校は安城町の13寺院、白鳥国民学校は内海町、神戸国民学校は六ッ美の寺院）に疎開した。安城駅で降りてバスはなく、4軒あまりの道を汗を一杯かきながら歩いて、赤松にある国民学校に着き、地元の大人や児童が歓迎会をしてくれたのを覚えている。

私達39人はお寺の本堂に寝泊まりして、地元の学校を借りて授業を受け、時には農家の農作業を手伝い夜は班毎に分かれ近くの農家で貰い風呂をした。知らない間に虱が発生しアツという間に大発生し全員に広がり、衣類を釜に入れて煮沸させて退治したことも、わすれられない思い出であった。また夜は本堂で土地の老人から「親鸞」のお話を拝聴した。食べ物には農村なので三食麦飯で、時々美味しい「うどん」を食べさせて貰った。おかずも南瓜、茄子、冬瓜など野菜が多かったが結構良かった記憶がある。（実際食料難になったのは戦争に負けてからであった）

この年の秋頃より空襲が始まり、高さ八千メートルぐらいの上空をB29爆撃機が5機、6機と編隊を組んで飛んで行くのがよく見えた。丁度今のジャンボ旅客機が上空を飛行機雲を描いて飛んで行くようであった。B29爆撃機を撃ち落とす高射砲も日本の戦闘機もそんな高いところへは行けなかった。そして12月頃から名古屋などの工場に爆撃が始まり、名古屋の角に黒煙が立ち昇ると、私達児童もそれぞれ自分の家や、お父さん、お母さんが心配でたまらなかった。

名古屋が空襲され子どもなりに心配していた12月7日午後1時36分頃、熊野灘を震源にマグニチュード8.0の東南海地震が起こった。地面が突然大きな波を打ち揺れ出した、激しい震動で立っていられない、地面に屈み込んでいるとお寺の灯籠や石塔が次々倒れ、鐘楼は倒壊、池の水は揺れて地面に飛び出て付近は水浸し、名古屋の港近辺や半田の軍事工場は大きな被害を受け、大勢の人が死んだ。私達は昼間だったのがよかったのか怪我をした児童はいなかった。

年が変わり昭和20年1月13日（1945年）真夜中の午前3時38分頃、今度は渥美半島を震源とするマグニチュード7.1の三河地震が発生した。1か月前の大地震では倒れなかったお寺が潰れ私は下敷きになった。真夜中なので皆寝ていた時、突然大きなゴースと大地の底から地鳴りがし、真っ暗闇の中でドスンと縦揺れに私は転びながらも、本能的に外へ逃げ出そうと出口の階段へ走ったが、本堂は前倒しに倒壊し廊下も壊され、私は倒れた柱に足がはさまれてしまった。寝ていた布団で体を包み守ったりして、壊れた隙間から上を見ていたら真っ暗な空に青い光が輝くように走るのが見え、そちらの方へ上がっ

ていったら外に出られた。外へ逃げられたのは3人ぐらいでみんな下敷きになった。最初先生の声がして、1人2人と倒壊した家屋から出てきた。そして近所の農家の大人達が「子どもを助けよ！」と、自分の家も被害を受けているのに、自分達のことを後回しにして大勢集まってきて助けてくださった。農家の広場にワラ小屋を作り収容してくださった。余震の大きいのが頻繁に続き怖かった。真冬なので寒くて寒くて震え布団にくるまっていた。夜が明けて重傷者は打撲で、おでこや腕をぶくぶく腫らした友達がかわいそうであった。そして阿知波孝七郎君が倒壊した瓦解の中で、布団にくるまって寝たまゝの姿で発見されたが既に死んでいた。何処にも傷らしい箇所もなく私には死因がわからないでいる。クラス39人の内ただ1人亡くなり非常に残念であった。

昼頃、名古屋から親達が次々と駆けつけてくれ皆久しぶりに会うことができた。父はリングを持ってきてくれ皆で分けて食べたことが思い出される。私はクラスの代表だったので、翌日阿知波君の葬式にクラス代表で参列することになり、親達と一緒に名古屋へ帰った。名古屋は空襲と地震の被害で大変な中で葬式であった。

空襲で大変なのに今度は1か月に1回づつ、2回も大地震が東海地方を襲い、空からはB29の空襲でいつ何処で殺されるかも分からないようになっていたので、どうせ死ぬなら親子一緒に殺されようと私達は決心して、私は安全と思われている疎開先に戻ることを止め、名古屋に届まった。そして頻繁に空襲の修羅場を潜り抜ける羽目に遭遇するのである。

昼間の空襲から夜中に空襲されるようになって、爆弾から家を焼き払う焼夷弾になった。人が眠る夜を眠らせずに恐怖の夜を味わせる敵の心理作戦だと思った。夜な夜な空襲警報のサイレンがウウウウウウと鳴る度に、防空壕に避難するのがおっくうになり、だとしても家の中では安心も出来ないもので防空壕で暮らすようになった。私の家は前述したように石炭屋なので野積の石炭を積み上げて置く大きい広場や、燃料用の薪炭を格納する大きな倉庫があり、廃材を利用し、土盛りをして頑丈な防空壕を完成させていた。ある夜、寝ている間に大雪が降って防空壕の扉に深く積もってしばらく外に出られなかったときは閉口した。

忘れもしないのが3月12日夜遅くの空襲で、焼夷弾で我が家の百メートル手前までの町並みを焼き尽くし、四方八方から火の手が上がり何処へ逃げたらいいかも解らないほど周囲が火の海なのだ、東側は新堀川で隔てられているので石炭置き場の防空壕でじっとしていた。幸い延焼をまぬがれ夜が明けると、周囲の焼け跡から煙が立ち上り、人が焼け死んだのか臭い匂いが漂って気持ちが悪くなるほどだった。

我が家の付近は熱田砲兵工廠、日本車両、大同製鋼などの軍需工場に囲まれ

ていて、駅や工場周辺の民家は空襲の延焼で工場や駅に被害を及ぼさないために、前もって家を壊して広場に作るから出ていきなさいと命令して、住んでいる人を追い出し家を取り払って造った「家屋疎開」の広場に焼け出された大勢の人々が一時しのぎに逃げて集まっていた。

学校のある伝馬町の町並みは「知恵の文殊さん」から「新堀川」までの家並が類焼で焼け野が原になったが学校は助かり、1、2年生の縁故疎開のできない児童と、3年生から6年生までの縁故や集団疎開できない児童だけで百名ぐらいたった。学校へ行っても空襲警報になると家に帰されるので殆ど勉強は出来なかった。空襲が激しくなり燃やされる家が増え、焼け出された友達は何処へ避難しているかも知れず、学校へ来る児童はだんだん少なくなり50名ぐらいの半分にまでになった。全校朝礼をやっても毎日毎日児童が減って本当に寂しく惨めな思いであった。

それまで焼け残っていた熱田の町は3月19日の空襲で殆どやられ焦土化し焼け野が原となった。幸い私の家は焼けずに残り、鳴海の父の里に避難することになり、家財道具を満載したりヤカーを父母と次兄で引いたり押ししたりして運んだ。小学5年生になった私は4月の終りに鳴海国民学校に転校した。鳴海に住んで少したった5月17日、熱田の我が家も母校の伝馬国民学校も空襲で焼失してしまった。翌月の6月に校舎の焼け跡の片付けをしていた石川校長先生が、触れた不発弾が爆発して殉職された。名古屋の空襲は前後56回もあって東京に次いで多い空襲数だといわれ、名古屋市は焼野原とされてしまった。

鳴海への転居は、前年12月の空襲で破壊された家を修復して入居した。向かい側の（父の従兄弟の家）の裏庭に造った防空壕へ爆弾が直撃し避難していた子ども兄妹5人と祖母が爆死した。この付近でも5、6箇所爆弾が落とされ何人かの犠牲者が出た。転校した5年生の時、都会からの「よそ者」といじめられたが、6年生になると何故かお山の大將で威張っていた。

鳴海国民学校でも空襲警報になると家に帰るので勉強など殆ど出来ず、その合間に児童が校庭を開墾してサツマ芋を植えたり、天白川の河川敷へ行ったり畑にして大豆やサツマ芋を植えたり手入れしたり、成海神社へは枯枝や落ち松葉を集めて家庭用燃料にしたり、鶏やウサギを飼育させられたり、熱田の小学校や安城の疎開先では体験できない、田植えや畑仕事など、街の子どもの私にはそれなりに珍しく結構楽しかった気がする。

私は10歳で大地震の犠牲になった同級生の死に立ち会い。空襲で大火災の炎の中を逃げ、生きながら焼け死んだ人々や、新堀川に逃げ死んだ人、爆弾の爆発で殺された人、高い空から落ちて来る爆弾や焼夷弾の恐怖な落下音など、怖ろしい体験ばかりだった。今の平和日本を子子孫孫に伝えるために頑張ろう。

祖父父母たちの太平洋戦争

1、はじめに

「祖母9歳の戦争体験」 中学二年 服部 真由

戦争といえば、広島・長崎の原爆投下が思い浮かぶが……。私の祖母が住んでいた名古屋市もひどい空襲があり、当時まだ9歳（小3）だった祖母が体験した戦争の話を聞く事にしました。

2、祖母の戦争体験

「疎開先での出来事」

祖母は名古屋市昭和区北山本町で養蜂を営む父と、駄菓子屋を営む母と5人の姉弟で暮らしていました。戦争がひどくなると、名古屋への空襲が激しくなったので、稲沢の方に疎開していました。7歳の弟・9歳（祖母）・12歳の姉の3人で学校に通っていました。学校から家までの道のりには幾つもの防空壕があり、敵のアメリカの飛行機が飛んで来るたびに、何度も何度も防空壕に逃げ込むので、家にはなかなかたどり着けなく、まだ子どもだった祖母達は早く家に帰りたいばかりに、必死に走っていたそうです。

アメリカの飛行機は上空から爆弾や焼夷弾とか照明弾を落とすB29爆撃機と、航空母艦が日本の近くまで運んできた艦載機が、町や村の人々が逃げているのを追いかけて攻撃していました。一度、祖母達3人が逃げているのが見付かり攻撃され、足元に弾丸がバチバチ当り撃たれ、操縦していたアメリカ兵の顔がはつきり見えるほどの低空飛行で本当に怖かった。祖母はこの時（敵は子どもと分かり、かわいそうだと当たらないように撃った）と思ったそうですが、12歳の姉は、この事があってアメリカ人を憎んでいるそうです。

「終戦直後の名古屋」

戦争が終り空襲もなくなり疎開先から名古屋へ帰りました。祖母の住む近くの鶴舞公園付近。昭和区曙町は全部焼け野が原にされ、昭和区吹上の辺りが少しと祖母の住んでいる北山本町の一角だけが少し焼け残っただけでした。鶴舞公園の噴水の中には、焼けた死体が幾体も浮いていたし、老松町辺りの焼け跡には井桁の形にして積み上げた死体が、あちこちと、幾つも積み上げられ置いてあった。それを見て、祖母達は疎開をしていなかったら、空襲で殺されていたかも知れませんでした。

「生活の様子」

日本はまだ車の普及は少なく、荷物を運ぶのは人が背負う、天秤棒で担ぐ、荷物運び用に作られた重い自転車やリヤカー、荷車、大八車、そして馬車などでした。道も狭く馬車はよく道の真ん中で尿をすると、両側の溝（どぶ）が馬尿で一杯になってあふれて臭かったし、衛生上も今では失格だろうが、当時は

辛抱して文句いう人はいなかったそうです。

商店街に住んでいたため肉屋、八百屋、魚屋と商店は揃っていたが、売るような品物はほとんど何もなかった。生きるためにカボチャをよく食べた。他にサツマイモの蔓・すいとん・大根切り干しなど、祖母の家には蜂蜜があったため、甘味には困らなかったから、食べ物にはまだ恵まれていた方です。配給された食べ物のひとつに、脱脂粉乳の中にキャベツが入っているのがあり、まずくて食べられず、残すと怒られるので、口に入れて急いで手洗い場まで走って吐き出していた。駄菓子屋をしていた祖母の祖父は、当時としてはめずらしく英語が話せたので、アメリカ兵がよく遊びに来ていた。何もない時代だったので、アメリカ兵からチョコレート貰うのが、とても嬉しかった事を覚えている。子ども達が一番早く覚えた英語は「ギブミーチョコレート」でした。

3、祖母の話聞いて思ったこと

戦争の怖さを改めて感じました。ただただ、いろんな出来事にスゴク怖い一言です。戦闘機にバリバリと機銃掃射されたり、丸焼けになった人間の死体を目の前にした事があるでしょうか。僅か9歳、現在71歳の祖母が忘れずに覚えている。それだけ戦争はスゴイ出来事だったことが分かりました。私は、祖母が住んでいた現在の北山本町・鶴舞公園周辺の地図をみて見ました。回りには図書館・吹上ホール・学校などがあり、空襲で燃えて全部焼けてしまっていたことなど、とても想像が付きません。

平和な日々慣れすぎてしまって、贅沢ばかりしているなと思いました。それと同時に平和である事に感謝しなければいけないと思いました。祖母が「物を大切にして、捨てられない」理由が分かった気がします。今回、祖母に戦争中の話を聞かせてとお願いしましたが、今まで祖母自ら戦争の話をした事はありません。やはり、辛いのでしょうか。辛い思いは私一人で背負う、とした祖母のあたたかい、やさしい思いやりの気持ちが、伝わってきました。

祖母の話は戦争を知らない私達には、とても必要なことであると思いました。話の最後に祖母は、『当時のお母さんは、戦争の銃後を守って、とても強かった。精神的にも、生きること、子どもを育てるために一生懸命だった』と。

二度と起こしてはならない戦争。

祖父父母たちの太平洋戦争

「祖父の戦争体験」 中学二年 桂林 伸伍

1、はじめに

祖父の一番怖かった戦争体験である空襲の話が聞けました。内容を聞くと、この空襲がなかったら、祖父の人生が違った人生になったと思います。

2、祖父の戦争体験

昭和20年頃の名古屋市の空襲の話です。祖父の住んでいた場所は、名古屋市中区鶴重町（現Ⅱ錦3丁目）でした。ちなみに祖父は5歳で空襲の出来事を完全には覚えていないようです。しかし、怖く辛い思い出として残っているようです。毎日のように空襲警報が鳴り、防空頭巾を被り、防空壕に避難していたようです。その頃の祖父は、よく名古屋城で遊んでいたようです。しかし、祖父の家も倉庫も空襲で焼失し祖父の祖母が家が完全に燃えたのを確認してから、避難したようです。

避難場所に行く間、周りは四方八方に火があり、火の海だったようです。攻撃してきた飛行機はB29、焼夷弾という町を焼くための爆弾が沢山落とされ、町の火は更に大きくなったようです。B29が撃った薬莢が落ちてきて当り、亡くなった方も祖父の近所にいたようです。

避難所の小学校に無事に避難して、祖父はこれで大丈夫と思ったそうです。しかし小学校の隣の建物が燃え出し、次に川原町の方に住む親戚の家に避難して、何とか無事に過ごせたそうです。ちなみに祖父の話では、この日の空襲で名古屋城も燃えてしまったようです。その後に諸輪の方に疎開したそうです。その頃の祖父の思い出としては、いつも空腹で、あと、諸輪の公民館に軍人がいたそうです。現在の私達の諸輪中学校の場所に軍人の基地があったそうです。当時、子どもであった祖父は、大砲などがあると聞かされていたそうです。

3、祖父の話を聞いて感じたこと

祖父の話を聞いて、戦争はやっぱりいけないという気持ちが強くなりました。太平洋戦争が起きていなかったら、多くの人が死なずにすんだと思います。でも、その場合、今の私の祖父父母が知り合って、結婚していたかどうかは分かりません。祖父父母が結婚していなかった場合、私の父や母が生まれていたのかも分かりません。つまり、太平洋戦争がなかったら、今の自分が生まれていたのかも分かりません。日本の国が今のように民主的な平和国家になっていたかも分かりません。他の人達の人生も変わっていたかもしれません。

しかし、太平洋戦争のような大きな戦争があっただけではありません、大きな戦争により多くの尊い命が奪われます。命が奪われなくても飢餓で苦し

む人達もたくさん出てきてしまします。祖父母たちのように、空襲に襲われて家を失う人も出てきてしまします、空襲や兵隊にされ、大切な家族を失う人も出てきます。兵隊に行き無事に帰還することが出来たとしても、大切な家族の誰かが亡くなってしまっているかもしれません。

・戦争の規模が大きくなればなるほど、悲惨なことが多く起こりますし、多くの人達が悲しいことや辛いことを体験するのだと思います。戦争に勝てば戦勝国の利害は一時的に満たされますが、新たな利害の対立が起こればまた戦争を始めてしまう。それが戦争なのだと思います。敗戦国は多くの賠償金を支払わされ、同時に領土を失います。日本は太平洋戦争で多くの犠牲者を出しましたが、今では民主的で文化的な平和国家になっています。昨今の不景気による財政難はあるようですが、戦争もなく世界の大国と良好な関係を結ぶことが出来ていると思います。

今でも、世界の中では戦争や紛争が起こっている地域があります。しかし、私は国家や民族の利害などで戦争を起こすことは止めてほしいと願っています。どの国や民族にも、それぞれの利害や立場はあると思います。しかし、各国や各民族が、他国や他の民族の利害や立場を出来る限り認め、お互いに譲歩し合うことが出来れば、多くの戦争や紛争は回避できるのではないかと思います。

太平洋戦争による多くの犠牲のもとに、今の平和があり、その平和の中で自分は生かされているのだということを、祖父からの話を通して感じ取ることが出来ました。私達は太平洋戦争による多くの犠牲を、むしろ平和への教訓として、二度と戦争という過ちを繰り返さないように努力をしていかなければならないと思いました。

祖父父母たちの太平洋戦争

〔祖父の戦争体験〕 中学二年 近藤 匠

僕の祖父は昭和9年生まれの73歳。家族の中で唯一の戦争体験者です。自分にはない戦争の体験を祖父の話を通して少しでも理解しようと思い、年の瀬も迫った12月27日、祖父に話を聞きました。話を聞いて本当に悲しくなり、今の時代がいかに恵まれているのか実感できた。これは、祖父の話と、祖父の話から自分が感じたこと、思ったことを、自分なりにまとめたものです。

（祖父の話 空襲について）

アメリカの飛行機B29が10機から20機の集団で、上空一万メートルから爆弾による攻撃をした。その後攻撃は低空からの焼夷弾による攻撃に変わり、攻撃対象が軍事工場だけでなく、一般の木造住宅にも被害が広がり西方（名古屋）

屋方向)が真っ赤に焼けていくようになった。日本の戦闘機がB29に体当たりして長久手方面に墜落した。そんな中、名古屋などの軍事工場への攻撃を少しでも抑えるために、今の和合のゴルフ場あたりでは夜間に200球の電球を照らして、爆撃を防ごうとしていた。

昼間に、1機のB29がトヨタ自動車挙母工場(現トヨタ本社工場)の中心部に爆弾が命中して黒煙が上がった(その場所だけアメリカ軍のスパイにより軍事用品を製造していた事が分かっていて)制空権や制海権がなく航空母艦から出撃した艦載機により豊田市の北部にある伊保原という飛行場に毎日のように激しい空爆、機銃掃射があり、又、東郷町の方面まで敵機が飛んできたので怖かった。そしてアメリカ軍艦による艦砲射撃の音が響き続いていた。

(祖父の話 食料 集団疎開などについて)

戦争中は食料がなく、現在の東郷小学校を初めとした学校の校庭やゴルフ場ではサツマイモやカボチャが作られた。現在の諸輪中学校の前付近では、高射砲の陣地造りが行なわれていた。各家庭や学校では、集団疎開児童が増え、防空壕で冬の寒さの中で震えていた。学校でも食糧増産の奉仕作業が毎日あったそうです。空襲の危険から学校でまとまって学習するのではなく、各地の寺に分教場が開かれ3年生以上の児童を中心に学習していたそうです。

学校での食事は今のようないくつかの給食ではなく、一人一人家から弁当を持ってきました。初めは御飯と梅干しの「日の丸弁当」だったが、戦争が長くなり「米」がなくなりサツマイモの弁当の児童もいました。

(自分の思った事感じた事)

祖父の話聞き思った事は「なぜ人は、戦争をするのだろうか?」ということだった。戦争によって失う物は、数限りなくある。しかし戦争によって何か得る物は有るのだろうか、戦争によって得た土地やお金、そんなものはいつか無くなる。仮に戦争によって全世界を征服したり、悪い事をしている人間を更迭したとしても、そんな世界征服はいつか崩壊し、いつかまた悪が現れる。世の中に変わらない物は、何一つないというのに。人は時には逆らえない、一度失ったものは永久に元には戻らない。

だからこそ「命」というものは、かけがえのないものだと思う。人には人のやりたい事がある。それを戦争によって失った人が今迄何人いた事でしよう。そんな人達が今世界中にいる。こうしている間にも、銃を持ち戦争で死んでいく人達がいる。僕は、平和な国、平和な時代に生まれて本当に幸せだと感じるとともに、平和な国、平和な時代に生まれたからこそ、戦争反対を、知り、広め、伝えて行かなければならないと感じました。僕は、絶対に戦争には反対です。

祖父父母たちの太平洋戦争

「祖父の戦争体験」 中学二年 竹下 宏幸

1、はじめに

僕が祖父に戦争の話聞いた理由は、長崎に原子爆弾が落とされた時、祖父が今の僕と同じ年齢であったことから、当時の中学生であった祖父がどのような体験をしていたのかを、直に教えて欲しいと思ったからです。長崎市で今も医者として働いている僕の祖父は、現在75歳になっています。今年の冬休みに長崎へ家族で帰省した時に、戦争の当時に何を食べていたのから、何をしていたのか、原子爆弾が落とされた時は、どうだったのかなどの話を聞かせて貰いました。

2、祖父の戦争体験

戦争の当時は、麦ご飯、さつまいも、大根の葉、などを食べていたと言っていました。麦ご飯は麦がほとんどで、白いご飯はほんの少ししか入っていませんでした。麦ご飯は麦がほとんどで、白いご飯はほんの少ししか入っていませんでした。大根葉のおひたししか食べる物が無い日も少なくありませんでした。

当時の祖父の家族構成は、祖父の父母と、3歳上の姉、京都大学に行っていた兄、学校の先生をしていた姉の6人家族でした。祖父の父は三菱造船所で働いていて、戦艦などを造っていました。家は馬町に住んでいました。長崎の有名なお祭り「おくんち」が行われる諏訪神社や、長崎市役所が近くにあります。昭和20年8月に中学校2年生の1学期の試験が終わった頃から、祖父達は工場戦争で使う兵器の部品を作られるようになったそうです。

昭和20年8月9日、丁度その日は工場が休みで、祖父は3歳年上の姉と家で過ごしていました。すると午前11時2分に、いきなり「ピカッ」と稲妻のような閃光があり、驚いた祖父は庭の防空壕へ飛び込んだそうです。物凄く大きな音がしたと言っていました。祖父は近くに爆弾が落ちたのだと思い、おそろおそろの壕から出てみるととても驚いたそうです。周囲の多くのものが破壊されていた。そして家の中に入ってみると、畳の上にガラスや建具や襖の枠の破片などが雑然と散らばっていたそうです。

二間続きの部屋に置いてあった紫檀というものの凄く重い机が、隣の部屋まで吹き飛ばされていたそうです。ガラスの破片などを踏んで怪我をしないように、靴を履いて部屋の中を片付けたそうです。祖父の家は原爆投下地点から3キロメートルの所にあつて、投下された地点と家の間に山があつて、山がなければ確実に祖父の家付近も跡形もなくなっていたと言っていました。そしてガラスの破片を片付けて二階へ行って窓から外の様子を見ると、山のむこうにどす黒い煙がもくもくと立ち昇っており、更に白い煙も沢山立ち上がっていたそうです。

す。やがて駅の方から火が出て、焦げ臭い匂いが漂ってきました。その時、外出していた祖父の母が帰って来なかったので、物凄く心配しながら母の帰りを待っていたそうです。1時間くらいして母が帰って来たのでとても安心したそうです。

原子爆弾が落とされ人々は混乱していて敵がまた来襲してくるというデマが流れ、市街地から山の方へ逃げる人がたくさん出てきて、祖父の家の前の道路は火事で焼け出された人と山へ逃げる人で溢れていました。全身を火傷している人や、皮膚がはがれて体から垂れ下がっている人、その姿を見た祖父はとても心が痛んだそうです。どの家も瓦が吹き飛ばされ障子やガラス戸がなくなり、満足に生活が続けられる家は一軒も無かったそうです。空は原子爆弾の煙のせいで灰色になっていました。島の学校の先生をしていた祖父の姉は船で帰ってきましたが、爆弾が他にも落とされていると言う噂があったので、遠回りしてきたそうです。三菱造船所で働いていた祖父の父は無事だったそうです。

3、祖父の話を聞いて感じたこと

今回、祖父の話を聞いて、原子爆弾の恐ろしさと、戦争の際の食料の少なさにとても驚きました。今の私達は食料に事欠くことがない平和な世の中で生活していますが、戦時中の人達は相当な苦勞をしていたことが分かりました。もう二度と戦争は繰り返してはならないし、原子爆弾は二度と使用してはいけな

いと強く思いました。

祖父父母たちの太平洋戦争

〔祖父母の戦争体験〕 中学二年 柘植 厚志

僕の祖父は現在76歳、幼少時から諸輪に住んでおり、田舎の戦争中の様子について詳しく語ってくれました。祖母は現在77歳、幼少時は名古屋駅の近くに住んでおり、都市部の戦争中の様子について詳しく語ってくれました。現在には二人とも諸輪に住んでいて、戦争中の生活について直接話を聞きました。

（祖父の戦争体験）

戦争が始まったのは昭和16年12月8日でした。戦争が始まると父親や兄などの一家の中心人物は国から「召集令状」というものがきて、みんな国のため、戦争に出かけて行きました。召集令状は臨時召集・国民兵召集などの時に使用され、淡赤色の用紙を使用したので「赤紙」と呼ばれました。当時、小学4年生だった祖父の仕事は家の手伝い、しかし、近所の小学5、6年生はみんな「勤労奉仕」といって、三好などの農家へ「いも作り」などに行きました。祖父も5年生になって他の子とおなじように朝から晩まで「いも作り」をしたそうです。勤労奉仕は公共の奉仕として労力を無償で提供することです。

中学生になると「学徒動員」で、今の保見団地の辺りにあった飛行場へ行つて、ぼろぼろの飛行機を格納庫に入れて敵に見られないように隠したり、ぼろぼろの飛行機の修理などをしました。学徒動員は労働力不足を補うために学生、生徒に強制させた勤労働員のことです。

〈諸輪の悲劇〉

ある日、諸輪の向こうの上空に小さな蠅みたいなものが飛んでいました。何だろうと思って見ていたら、小さな蠅は大きな飛行機へと変わって、こちらへ迫ってきました。慌てて近くの防空壕に隠れると、逃げ遅れた人々はその飛行機からの機銃掃射に撃たれて死んでしまいました。『このようなことが日常化していた時代だった』と、祖父は語ってくれました。そして、昭和20年、終戦です。祖父は中学2年生でした。もし次の年まで戦争が続いていたら、祖父も戦争に行かなければならない年齢でした。

（祖母の戦争体験）

〈真っ黒な飛行機の正体〉

空襲が始まる少し前、祖母が小学4年生の時の事です。祖母が病気で寝ていて「ゴー」という音で目を覚ますと、上空には真っ黒い飛行機が飛んでいました。B29が名古屋を偵察に来たのです。当時の様子は皆なにか分からないようだった。あの時は分からなかったが空襲が始まったら、あの時の飛行機だったと祖母は語ってくれました。

祖母も中学生になると「学徒動員」で工場で働いている人の給料を数える仕事に就きました。ある日、空から焼夷弾が遠くの方に落ちて行くのが見え、方角は自宅の方角だったそうです。仕事からの帰りは空襲で汽車が不通なので、線路づたいに歩いて、家を見つけた時の第一声は「あった！」だ、そうです。

（一家での疎開4か月間）

祖母が学徒動員で働きだし暫くして、空襲の標的にされている名古屋市から親戚を頼って一家で疎開することになりました。名古屋は食料もなく自己調達も困難でもあったのです。そして致命的なことは一家を支える父や兄、頼っていた男達を兵隊にとられていたのです。近くに親戚がないので、鳥取までの疎開です。朝4時に満員の汽車で出発して、夕方4時に鳥取に着くまで、生後6か月の赤ちゃんから大人までが何も食べずに水だけで凌いだそうです。

（戦時中の食べ物）

植物Ⅱかぼちゃ・さつまいも・さつまいもの茎を（おひたしなどで食べる）

食べれる野草探しなど。

動物Ⅱイナゴ（刈り入れ前の稲穂に集まる昆虫）小川や池で鮎、泥鰌、鰻、

田圃で田螺などを捕獲し食したが常に量は少なく、いつも空腹でした。

(忘れてはいけない過去)

今の日本は、学校から帰ったら焼夷弾で家が焼かれていた、ということも学校で勉強をせずに、戦争の武器を作ることもなく、それが当たり前だと思って生活しているけれど、今回祖父母の話聞いて「それが当たり前ではない」という時代があったということ、そして、それをさせられていたのが僕達の年代の祖父母達であったということだ。

食事がさつまいもだけという時代、皆お腹をすかせていた時代、今の僕達は「キライ」の三文字で簡単に食事を残しすぎている。『今の日本は裕福』このことを肝に銘じておこうと思った。

祖父父母たちの太平洋戦争

「祖母の戦争体験」 中学二年 西 剛央

1、はじめに

刈谷市に住む僕の祖母は68歳です。お正月に会っている話を聞きました。祖母はわずか5歳で太平洋戦争を経験しました。僕は5歳の頃は物心がつき玩具で遊んでいました。その僕と祖母の違いを知りたいと思い、祖母の記憶をたどり、戦争について聞きました。

2、祖母の戦争体験

僕の祖母が生まれてすぐに太平洋戦争が始まりました。それから5年後には日本も空襲され、祖母の記憶に一番残る出来事が起こりました。それは「熱田空襲」です。その日、飛行機がたくさん飛んで来て爆弾が幾つも、幾つも落ちてきました。爆弾には二つの種類があるそうです。普通の爆弾の他に焼夷弾という町を焼くための爆弾があります。祖母の家の隣に焼夷弾が落ち燃え広がりました。祖母の家を含めた周辺の広い地域が焼き尽くされ、交通機関も焼き尽くされたようです。自宅が焼失したので、祖母のお母さんの知人がいる諸輪まで、お母さんと歩いて辿り着いたのです。そして貧しい暮らしが始まったそうです。

戦時中は名古屋だけではなく、日本全体が空襲で焼け野が原にされたと聞きました。今これだけ栄えている日本のことを考えると、僕には信じられません。又、日本全体が空襲に襲われたのに、なぜ奈良の東大寺や法隆寺が残っているのだろうと不思議に思いました。その事を祖母に尋ねると、世界的にも貴重な文化財の多い京都や奈良には殆ど空襲が無かったのだと教えて貰いました。

沖縄では次々とアメリカ兵が上陸してきて、たくさん日本人が命を落としました。祖母によると、沖縄では女学生までもが「ひめゆり部隊」という看護要員として戦場へ行ったそうです。祖母によると、ひめゆり部隊は敵に捕

まって日本人の恥じを晒すな、捕虜になるなら自決しろと教えられていたため、崖から投身自決をしたり、防空壕で自決したりと聞きました。数年後には、かつての防空壕の跡に「ひめゆり塔」という墓標が建てられたそうです。沖縄での地上戦が悲惨な状況に陥っていたにも関わらず、日本は特攻隊を編成し最後の一人が死ぬまで戦い続けるという立場を取り、多くの将来ある若者が特攻隊で命を落としたそうです。アメリカは飛行機を作る工場を焼夷弾で破壊し、ポツダム宣言の受託を日本に求めたものの、政府はそれを拒否したそうです。

ポツダム宣言を拒否してから1か月後の8月6日に広島に原子爆弾が投下されました。多くの人が被爆し亡くなりました。また、8月9日には長崎にも原子爆弾が投下されました。祖母も原子爆弾投下の報道にとっても驚愕したそうです。そして8月15日、昭和天皇が日本の降伏をラジオで国民に告げました。戦争が終わって少し祖母の食生活は改善されたそうです。茶碗一杯のご飯と小魚二匹と漬物という、とても質素な食事がまるでご馳走のように有難く感じられたそうです。

3、祖母の話を聞いて感じたこと

ひめゆり部隊の女学生や特攻隊の若者は、大切な人達を守るため、戦後の平和な社会を建設する為に命を落として行ったのだと思います。私達と同世代の若者を含め多くの方々の犠牲のもとに、今の平和があると思えました。太平洋戦争についての客観的な知識は持っていましたが、祖母から直接戦争体験を聞かせてもらうことで、戦争体験をした方々の気持ちを理解させて貰う事が出来ました。祖母は最後に次のように言いました。『戦争はそれを知らない世代が考えるほど甘いものではない。自分の命を犠牲にしてまで国を守ろうとした多くの人達が亡くなっていった。町も焼かれ、生き残った人達も貧しく苦しい生活をした。私は、世界から悲惨な戦争や紛争がなくなることを、心から願っている。』

僕はこの祖母の言葉を聞いて、すごくかなしく思いました。また、今後の国際情勢にも目を向け、世界平和を実現するために、自分達に何が出来るかを考えていこうと思いました。

祖父父母たちの太平洋戦争

「祖父母たちの戦争体験」 中学二年 片出 実里

1、はじめに

私は三重県に住んでいる曾祖父（91歳）と曾祖母（86歳）からは電話で、一緒に住んでいる祖母からは直接太平洋戦争について聞きました。聞いた内容は「戦争時代の食べ物と生活」「その時代に強く思ったこと」「戦後の暮らし」

です。

2、戦時中の食べ物について

「米」主食の「米」は配給されていたそうです。しかし稲からのそのまま取った米で配給されるので、ビンに入れて細い棒を使ってつついて、糠を摩擦で取り白米にして、量を増やすために「お粥」にして食べていたそうです。

「野菜」大きな庭がある家は庭園を畑にして薩摩薯や南瓜を耕作して、薯の蔓葉もお粥に混ぜて食べたそうです。家に庭もない人は野菜が作れないので、大切にしている「指輪・着物・時計・靴・洋服など」を持って農家で食物と交換する人もいたと言っていました。

「他の食べ物」他の食べ物は少なく、お菓子などは食べることが出来なかったそうです。

3、戦争中の生活について

「生活」家の庭に防空壕を造り、空襲警報が鳴ると防空頭巾（綿で出来ている）を被り、急いで防空壕へ避難します。防空壕の中は狭く暗く、夜は敵に見つかるので、灯りをつけることが出来ず、つけても灯りに黒い布を被せて、本当に小さな灯りでじっと我慢して耐え忍んでいたそうです。戦争が長く続き武器にする鉄が不足したので、家庭用品の鉄瓶・スプーン・フォーク・鍋など生活必需品も全部とられて苦勞したようです。

「服などの衣類」手ぬぐい、タオル。ハンカチ、衣類も配給制になり、男の子に赤い足袋が配給され、嫌がった子どもに「この赤色は爆弾から守ってくれる色」と母親が説得したとも話してくれました。

「小さな抵抗」健康な成人男子は全員戦争に徴兵され、残った人達は「戦争に行った人達はお国のために頑張っているのだから」と思い、町内で竹槍を作り、アメリカ兵を刺し殺す訓練を婦女子も一生懸命しましたが、アメリカ軍は爆撃機で高い空から空襲したので、竹槍は実際には使用しなかったそうです。

4、その時代に強く思ったこと

「戦争に勝つまでは辛抱と思い、苦しい生活に耐えてきた」と言っていました。学校の先生だった曾祖父は、周りの木や家が焼けていくのを学校から見、その光景は今でも脳裏に焼き付いているそうです。とても残酷だと思ったようです。8月15日のラジオ放送で天皇陛下からの敗戦の宣言を聞いた時は、みんな涙を流していたと言います。

5、戦後の暮らし

「遊び」遊びは、ボール・お手玉（手作り）・石蹴り・野球（素手、ボール、バットは手作り）で、今はあまりやらない遊びもあるけど、心のこもった物を作ったり使ったりして楽しく過ごしていたことが分かりました。

「学校」学校へ行く時のランドセルは、母親がダンボールを利用して手作りであつたそうです。学校では「DDT」という消毒粉を、頭、首、背中に散布され、給食の前には必ず「虫下し」「かいにんそう」と言う薬を飲まされ、体内にいる寄生虫を殺したそうです。とてもまずくて「薬の中で一番嫌いだ」と祖母が言っていました。他にも祖母が使っていた教科書は、墨で真っ黒に塗りつぶしてある所もあつたそうです。

「戦争の時に使った品」戦争の時に使っていた防空頭巾は、祖母の実家の筆筒の奥に入っているそうです。

6、戦争のことを調べてみて
太平洋戦争の事を身近な人に聞いてみて、すごく辛い体験をしていたことを初めて知りました。電話で話を聞かせてくれた曾祖父は「戦争のことを思い出すと震えてくる」と言っていました。悲惨な戦争をなくすには何をすれば良いか、考えさせられる一言でした。そしてこれほど戦争を身近に感じことは初めてでした。これからの日本はどうなっていくのか分かりませんが、ずっと戦争のない平和な国になってほしいです。これからの歴史にも興味が出てきました。

祖父父母たちの太平洋戦争

「祖母の戦争体験」 中学二年 白木 もも

1、はじめに
滋賀県大津市に住む私の祖母は現在80歳です。いつも元気いっぱい笑顔でいきいきと暮らしています。食事も毎日三食とも自分で作り、どこへでも歩いて出かけて行き、庭の手入れもするなど、何でも元気にこなしています。このエネルギーはきっと戦争中、前線で敵と戦っていた兵士以上の恐怖と。空襲と爆弾で「死」を体験して学んだことも生かされているのだと、私は思います。

2、祖母の戦争体験記

大阪に住んでいた祖母が3歳の時、近現代史史家が第二次世界戦争の導火線になったと評した「満州事変」を自作自演で引起こし。9歳の時、日中戦争に拡大して、女学校1年生（今の中学1年生）の時に、「宣戦布告、戦争に突入する。」と放送が流れ、日本海軍が真珠湾に奇襲攻撃して太平洋戦争と次第に大きな戦争となり、日本の国も空襲されるようになりました。日本は、祖母の小さい頃から戦争をしていて、男は兵隊にされ、工場で働く男が足らなくなつたので、祖母達のような女学生も学校から強制的に軍需工場へ行かされました。

女学生は軍需工場、男子学生は特攻隊や兵隊に志願されました。軍需工場では、発動機（エンジン）の部品をひたすら作りました。もちろん給料はなし、ご飯は、白米はほんの少し、ほとんど豆かすの食事です。祖母は勉強がしたくても、させて貰えませんでした。

英語は敵の言葉だと教科書は取り上げられ、英語の使用は禁止、例えばライスは「米」と、野球用語も日本語にされ、ストライクは「よい玉」「触体」はデット・ボールなどと。夜は電灯をつけて明るくしていると、それを目標に爆弾を落すので、灯火管制といって灯りを消して真っ暗な状態にして、息を殺すようにしていました。むろん勉強もできないばかりか、本も読めません。どうしても灯りをつけないといけない時は、窓から光が外へ漏れないように、カーテンは真っ黒な布にしたり、電灯を黒い布や紙で覆って電灯の下だけ明るくしたそうです。街路灯も門灯も消して外は真っ暗な暗黒の世界だったそうです。

空襲の爆弾から身を守るために、庭の無い家は畳と縁板を外して、縁の下に防空壕という穴を掘り、空襲警報になると防空壕へ避難したそうです。防空壕の中に入れば、必ず安全というわけではなかったようですが、少しは危険を防ぐことができたそうです。しかし焼夷弾は家を焼き払うので、防空壕に入っていると焼き殺されてしまうのだそうです。そのような状態が2年余り続き、庭のある人は、庭に大きな防空壕を掘って、その中で暮らした人もいたようです。配給される食料はお米はありません、炒った豆や、大豆の油を搾り取った豆滓だったりなので、食べれる野草や昆虫のイナゴなどを自分達で採って食べました。空襲と食べるものがない戦争が続いていたので、いつ命が奪われるかわからない状態でした。ですので、毎朝、家族が出かける時は、家族全員で「水盃」お互いに最後の別れになる儀式の盃を交わし、それから軍需工場へと出かけたそうです。私は本当にびっくりしました、今の私と同じ年齢だった祖母の学生時代の話なのです。いざという時の集合場所も決めたそうです。

祖母は女学校3年生になりましたが、修学旅行どころではなく、毎日、工場でひたすら働き戦闘機の部品を作っていたそうです。休み時間も少なく、友達と話をしたり、家から少し食べ物を持ってきたり、食べているのを憲兵に見つかったりすると、ものすごくおこられたそうです。女子は工場で働き、男子は兵隊に志願して特攻隊へ入る人もいたのですが、特攻隊は飛行機に爆弾を積んで敵艦に体当たりして、命を落としていったそうです。燃料が不足していたので片道の燃料で出発して、帰れないようになっていたのです。やがて武器を生産する原料が不足してきて、どうするかと考えた結果、なんと家庭で使っているお玉や包丁、鉄の鍋や釜とか、アルミ製の炊事、家庭用具を供出せよと命令し、それを溶かして飛行機や兵器を作ったそうです。そしてまだ足りないとお寺の鐘や個人の宝石指輪類などの貴金属類も供出させられました。

いつものように軍需工場で働いていたら空襲警報になり、先生が「あなた達

の命の責任は取れませんが、各自で安全と判断した方へ逃げなさい。」と告げられ、祖母は友達5人ほどと一緒に、暗い空の方は米軍機の空襲でやられている方なので、まだ爆撃されていない明るい空の方を目指して走り続けたそうです。着ている服の色は国防色といって、土の色に似た保護色なので、米軍機が迫ってくる目ざとく隠れる場所を見つけ、保護色を生かし伏せて隠れたりして、明るい空の方へと走り体力の限界を感じ、へとへとになり立ち止まったそうです。その時、友達が「死ぬなら一緒に死のう、こっちにおいで。」と呼んだので、祖母は自分のいた場所から1メートルほど動いて友人の場所へ移動した瞬間、祖母の元いた場所に不発弾が落ちたそうです。そして、またひたすら逃げながら走り畑のある所へ辿り着きました。畑の持ち主のお婆さんが「早くお入り、よく遠い所からここまで逃げられたね。」とおっしゃって、温かく迎え入れてくれたそうです。そして、久しぶりの白米のお握りと沢庵を戴き、本当に久しぶりなので、その味は今でも忘れていないと、おっしゃいました。

終戦の年の6月に残念ながら祖母の家は空襲で全部焼けてしまいました。8月に戦争が終わったという知らせが放送で流された時は、とても嬉しかったそうです。しかし、戦争が終わってから食料難は悪くなるばかり、食料の配給も止まり、大阪などの都市は食料の遅配40日でした。詳しく説明しますと、国が国民に食べさす食料を40日も渡さないことです。サツマ芋の蔓を煮て食べたりしていたそうです。その後、ほとんど学校へ行っていないのに卒業証書をいただき、女学校の仲間の中には戦争で命を落とした方もいたそうです。

3、祖母の話聞いて感じたこと

祖母の青春時代は、戦争で楽しむことができず、薬剤師になる夢も諦めるほど辛い時代でした。そのようにして苦しい時代を乗り越えてきてくれた人達が大勢いるから、今の私達はこんなに幸せに暮らすことができます。些細なことでも我儘を言ったり、弱音を吐いたりしている今の私達は、祖母の時代から見れば、とてもひ弱だと思えます。時代が違えば仕方がないと考えるのはでなく、もっともっと強くみんなが生きていかなければならないと思います。生きることの幸せを感じ、生かされていることに感謝し、辛いことにも挫けずに乗り越えていく強さが必要だと思いました。

世界の平和は、私達の手で守っていかなければなりません。『こんな悲惨な経験は私達だけでええ、戦争は絶対したらあかん。』と断言した祖母の言葉を、身にしみて感じました。

祖父父母たちの太平洋戦争

1、はじめに

〔祖父の戦争体験〕 中学二年 高木 聖里那

私は太平洋戦争について、祖父の小学校1年生から2年生にかけての体験を

聞きました。それは昭和20年頃の体験で、その頃祖父は九州の宮崎県に住んでいました。

2、祖父の戦争体験

まず戦時中の人々の食事は「さつまいも」ばかりだそうです。都会の人々は食料が無かったそうです。私の祖父の父は、目が悪かったので兵隊にはならず、兵器などを作る仕事をしていたそうです。祖父の父は、仕事の後に知り合いから食肉をいくらか分けて貰える環境にあり、恵まれていた方だったそうですが、都会の人達は栄養失調の人が殆どだったようです。栄養失調になると、体は痩せていてもお腹だけが出るそうです。

毎日学校には行けませんでした。なぜなら毎日、空襲警報のサイレンが鳴って、B29爆撃機が飛んでくるからです。サイレンが鳴る度に近くの防空壕へ避難していたそうです。ですの勉強は近くの公民館に集まってやっていました。しかしある日、B29爆撃機が飛んできて、公民館に10キロ爆弾を落とすといきました。この爆弾には狙いを外さないために、爆弾の先端にプロペラのような装置が着いていたそうです。そして、祖父達がいる公民館に爆弾が落ちた時、たまたま爆弾が不発であったため、祖父達は助かりました。その時は、とても怖くてたまらなかったそうです。10キロ爆弾は実際に爆発すると、地面に3メートルの穴をあけるくらいの強力な爆弾だそうです。

公民館での勉強が終わり家に帰ると、明るい内に食事と入浴を済ませました。しかし風呂はお湯でなく水でした。火は焚けないし、ロウソクも物資不足ではありません。だから夜は真っ暗でした。とても大変だったそうです。しばしばB29爆撃機が爆弾を落とすにやってきました。しかも爆撃機には機関銃が設置しており、空中から弾を発射してきました。祖父の付近の家は石油が入っているドラム缶が置いてあり、ドラム缶に弾が当たるとドラム缶が爆発したそうです。まるで花火のように爆発し黒煙をあげるそうです。祖父はとても怖かったと言っていました。

ある日祖父達の見ている上空で、日本の戦闘機とアメリカの戦闘機との空中戦が始まり、田圃に戦闘機が墜落したので、女性達が竹槍で米軍機であれば敵なので突き殺そうと集まったら、落とされたのは日本の戦闘機なので、すぐに傷の手当てをしたそうです。祖父は当時小学1年生で、まだ幼かったのに、太平洋戦争の体験をよく覚えていることに驚きました。

3、祖父の話を聞いて感じたこと

やはり戦争は無意味だと思います。どうして戦争をして、多くの人が死ななくてはならないのかと思います。もし戦争をするなら、関係のない一般市民を巻き添えにしてはいけなと思います。戦争を始めたのは誰なのでしょう。

本当に無意味です。戦争に勝った国は喜ぶでしょうが、多くの人が亡くなっているのに、心の底から喜べるでしょうか。戦争を始めるような人達は最低だと思っています。このレポートを作成して、祖父はとても恐ろしい体験をしていたことが判りました。そして、このレポートを作成するに当たって、太平洋戦争の話を祖父から聞かせて貰ったことで、平和の尊さを理解できました。戦時中は本当に大変だったそうです。二度と悲惨な戦争を繰り返してはなりません。

祖父と母たちの太平洋戦争

「祖母の戦争体験」 中学二年 永井 優歩

1、はじめに

「戦争なんてしてはいけない」

そう語ってくれたのは京都に住む私の祖母です。現在74歳になる祖母に、太平洋戦争の当時の様子について聞きました。

2、祖母の戦争体験

「戦時中の食べ物」

戦時中は主食の米が無く、代用食として「じゃがいも」ばかりを、茹でて塩を付けて食べていた。他の食料はお金を持って八百屋まで取りに行った、というのは野菜も配給制で家族数で量が決められているからだった。食べ物の配給は人が生きていく必要な量でないもので、生きるに足らない量は母と一緒に電車に乗って農村地帯へ、着物や指輪など高価な品物と米を交換して貰いに行った。米と交換できるときは少なく、殆ど根菜か南瓜などの交換は良いほうであり、交換出来ない時もあり交通費まで使って行ったのに残念で悲しかった。交換出来ても駅に降りて改札を出る時、警官がいて荷物を調べ、食べ物が入っていると没収されるので、前もって打合わせをして、駅の手前で走っている汽車に向い手を振る家族目掛けて、投げ落とすことなどもしたそうです。

本当に食べる物が無くなり、家の周りの雑草やサツマ芋の葉を茹でて食べたり、田圃で「いなご」を捕獲して食べた。祖父の隣人はソース屋で、食べ物の味付けによくソースが使われ、近所同士の支え合いが生活の支えにもなっていた。小さい時は甘い物が食べたいと騒ぎ、「柿の皮」を干して搗り潰し、砂糖の代わりにした。このように食べ物に好き嫌いなどと言っていられない、食べる物があるだけで幸せな時代だったのです。

「戦時中の学校」

祖母は国民尋常学校に通い、わら半紙の教科書で普通の授業を受けた。国語の授業では毎時間、戦地にいる兵隊さんへ「慰問文」と言う手紙をかかされたそうです。また戦死した兵隊さんのご遺骨を、ご家族へ届ける方法は、汽車で

駅に到着します。地域社会の人々は勿論、学校から先生も生徒も駅に集まり、大勢でお迎えします。ご家族の人は泣かずに涙をこらえて、ご主人や我が子のご遺骨を受け取るのですが、骨壺には遺骨でなく、死んだ通知書紙一枚だけとも言われておりました。祖母も子どもながらに本当に悲しかったと申しておりました。また兵隊に行くときは、近くの神社に地域社会や学校から先生と生徒全員集まり、軍歌を歌いながら駅まで行進して「天皇陛下万歳」と言って、出発をお見送りしたそうです。

京都は世界遺産に指定された建造物がたくさんあったせいか、爆弾は落ちなかったが、田舎に疎開する子も多く、家族と離れて学童疎開したそうです。そういう子どもを見ると、何ともいえない気持ちになったそうです。学習はまずカタカナを習い、イソップやグリム童話もよく習ったそうです。女学校に入学し、1学期は市電で30分かけ学校に行って着いても「空襲警報」が出ると直ぐに帰宅させられ、勉強など殆ど出来ない状態でした。結論として無駄なお金を使ったことになり、日に日に母への申し訳ない気持ちが大きくなっていったそうです。

終戦後は学校制度が変わり男女共学になり、祖母が通っていた女学校も共学になり、女子はそのままでもよかったものの、男子は女子用に造られた校舎で、とまどう思いもしたと思う。いい学校とは言えなかったが、やっぱり友達がいると、学校は好きにならずにはいられなかったそうです。

「戦時中の祖母の家族」

家族は両親と4人兄弟で、終戦の少し前に家族がバラバラになってしまった。兄は前から軍人になりたくて、志願したが規定より背が低くて失格だったが、兵隊が戦争で死んで軍人不足なり、特攻隊予備隊に合格入団し、毎日訓練をしていた。弟は同じ学年の子と一緒に田舎のお寺に集団疎開をしていたので、祖母は両親と3人で終戦まで暮らしていた。軍人になった兄が戦場へ行かされたり、親戚の人が戦争に行くのではないかと思うと、食べ物や喉を通らないこともあった。お国のために尽くしてくれている人のことを考えると、とても辛かった。軍隊が支配していて、軍人が言ったことに拒否権のない家族は、生活に苦しむだけであった。

3、戦争について祖母が思うこと

戦争は絶対にしてはいけない。勝った方も負けた方も膨大な数の死者が出て、良いことなど何もない。悲惨な戦争は、過去の歴史だけでよい。そして、過去の歴史を今に伝えていくことが、私達の使命だ。今でも戦争をしている国や、核兵器を作り出している国々がある。見えているのに見えない振りをしたり、聞こえているのに聞こえていない振りをしたりしてはいけない。私達には言葉があるのだから、言葉で平和を築いていって欲しい。

4、祖母から話を聞いて感じたこと

今の私達は、好きなものを買って、好きなものを食べて、好きなことをして・・・間違っているとは思わない。だけど、戦争当時は考えられないことをしていたのだ。戦争の恐ろしさが一つの歴史の一コマになってしまい、今ある生活が当たり前になっている。ろくに食べられない、厳しい決まりに縛られている、その日その日を命がけで生きている。そのような当時の生活に、今の私が耐えることが出来るのかと自問自答した。

今の生活を変えることは出来ないが、戦争当時の生活と比べて考えるべきところはあると思う。平和な時代に育っている私達は、戦争の悲惨さを知らない。しかし、今もどこかで戦争や紛争のために苦しんでいる人々がいる。私は、同じ人間として「知らない」で済ませてはいけないと思う。当時の戦争に反対出来ない状況におかれ、国民全体が戦争に協力的に動いてしまったという過ちを二度と繰り返さないためにも、今の時代を生きる一人ひとりが戦争について考えるべきだ。

戦争を体験していない私にとって、戦争を体験してきた人達の苦しみや気持ちを、同じように理解することは困難なことです。しかし、「戦争は二度と起こしてはいけない」という気持ちは大切にしていきたい。今回のレポート作成で、知らなかった祖母の辛い気持ちや、大変な苦勞を知ることが出来てよかったと思いました。

祖父父母たちの太平洋戦争

「祖母の戦争体験」 中学二年 舟橋 朋

1、はじめに

60年以上前太平洋戦争が起きました。戦争中の子ども達はどのように生活をし、何をしていたのでしょうか。そこで当時子どもだった祖母に、戦争体験について聞きました。この体験は祖母が12歳の時の話です。

2、祖母の戦争体験

「戦時中の食べ物」

当時「米」の代わりに主食になったのは「さつまいも」「じゃがいも」「うどん粉」などで「代用食」と言っていました。これら全てが配給制で、1日1回しか食べられないほどの少ない量しか配給されませんでした。米は大変貴重であったので、炊く時は米3、麦7の割合でぼろぼろのまずいご飯でした。うどん粉を使って団子や、うどん粉を水で溶かしその中に野菜などを入れて食べました。また食べ物を探しに行きました。春は池や田圃でタニシを獲ったり、ドジョウを捕まえたりしました。夏は、庭に植えてあるイチジクが実り毎日5

コぐらゐは食べました。秋は、庭にある柿を食べたり、裏山で5種類ほどの食べられる茸を採りに行きました。冬は庭の蜜柑を採って食べたり、そのほか、「はこべ」「たんぽぽ」などの雑草も、食べれるものは何でも食べました。

食肉の配給は殆どなかったようです。人々はそれぞれの家で鶏やウサギを飼育して食用にしていました。山羊を飼って乳をとったり、生きるために必死に工夫していたそうです。それでも肉類は不足なので、カエルやスズメまで捕獲してタンパク質を採取して生き延びていたのです。

「生活の様子」

戦争中祖母は小学校へ通っていました。朝6時に起き朝食を食べ、4キロメートル離れた学校へ1時間歩いて行きます。学校は「修身教育」で始まり、禅宗のお経を唱え、それから授業や仕事に移ります。戦時中の学校は畑仕事など農作業が中心で、戦争に行っている農家のお手伝いに小学生が農作業奉仕にしていたのです。学習勉強は殆どなく、たまにあって1日せいぜい1時間か2時間くらいと話してくれました。

学校給食はなく、週に1度くらい学校の運動場を耕した畑で採れた野菜などを食べました。その日以外は家から弁当を持って学校へ行きました。学校から帰ると、畑の雑草を抜いたり、子守り、食べ物や池や川や山へ探しに行ったり、枯枝や松の落葉を集めたりして、炊事やお風呂の燃料にしました。日曜日は、朝4時に起こされて、小麦を4キロメートル離れた製麺所へ1時間歩いて行き、小麦をうどん粉にしてもらいます。広い地域に製麺所は一所です。1時間ぐらい並んで順番を待ちます。帰る途中に農家に寄って野菜を買います。お昼ご飯は大抵「うどん」で、食べ終わったら燃料にする枯木を拾いに裏山へ入ります。そして食料を探したり、採ったり、薬草履も自分で作りました。

空襲は1日中ありますが、朝は少なく、昼は少しあって、夜が一番多かったそうです。そのため、夜は勉強出来ません。電灯の明かりが少しでも外に漏れていると、漏れている明かりを目標にして爆弾が落とされます。警防団が明かりが外に漏れていないか探して回り、漏れているときつく叱られます。

「怖かった体験」

戦時中の怖かった体験を、祖母は次のように語りました。昭和20年7月頃のことです。お母さんと二人でお昼ご飯を食べていたら、突然家の周辺あちこちに爆弾が落とされました。家から150メートル離れた池に2発、裏山に1発。後で見に行ったら爆弾の衝撃で防空壕が潰されて、裏山に落ちた爆弾は家が一軒丸ごと入るような大きな穴が出来ていました。空襲警報が鳴って、お母さんと二人で防空壕に避難していたら、二人共押し潰されて死んでいたのです。この時は、空襲警報が鳴らなかったから助かりました。思い出しても本当

に怖かったです。

「祖母から話を聞いて感じたこと」

初めて祖母に話を聞いたときは、とてもびっくりしました。自分とあまり変わらないはずの子どもが、とても苦労しながら生きていたからです。子どもの時の祖母の生活は、私の想像以上に辛いものだったと思います。「朝4時に起きて、家から1時間かけて歩き、そこでまた1時間並んで小麦やうどん粉を交換しに行く、食べ物が少ないから、普通は食べないような雑草や鳥も食べる」このような生活に今の私では耐えることが出来ないと思います「とにかく、こんな体験をしながら生きてきた」と、祖母は話の最後に言っていました。

今の日本は大きな争いもなく、昔に比べれば平和であると私は思います。しかし、世界に目を向ければ、武器を所有してその武器で人を殺したりする人はまだいます。だから、人間同士の殺し合いがなくなり、すべての人々が安心して生活できる平和な世界ができると思います。

祖父父母たちの太平洋戦争

「祖母の戦争体験」 中学二年 堀部 智恵

1、はじめに

今回、私は太平洋戦争の当時、小学校1年生であった母方の祖母から、戦争の体験を聞かせてもらいました。

2、祖母の戦争体験

当時、名古屋市の中村区に住んでいた祖母は、軍隊にいる叔父の慰問のため、汽車に乗り「ぼた餅」を作って、滋賀県の米原まで持っていたことを覚えていたそうです。今なら、新幹線であつという間に到着してしまう場所ですが、その頃は行くだけで大変だったのではないのかなと思います。今とは違い娯楽などは考えられず、とにかく生きるために必死な生活だったそうです。主食の米も少なかったので、量を増やすために「いも」を入れたり、「すいとん」にしたりしていました。また、夏は川で魚を獲り、秋はイナゴを捕まえて佃煮にして、おかずにしていました。子ども達も遊ぶためではなく、生きるために魚やイナゴをとっていたそうです。

着るものは、大人の着物をほどこいて、子ども用衣類やモンペに作り直すなど、布を大切に使っていました。5人兄弟の末っ子であった祖母は、学芸会の時、一番上のお姉さんに、当時では高級な別珍の服を作って貰ったそうです。それは、布団の襟に縫い付けてあった古いのを、何枚か使用して作って貰ったそうです。祖母にとっては、今でも忘れられない思い出のようでした。

3、祖母から話を聞いて感じたこと

いろいろな話を聞いて私が思ったことは、生活は今より貧しかったけれど、とても自然で無駄のない生活をしていたのだと思いました。それに比べると、今の生活は贅沢すぎて、反省すべき点がたくさんあるように思いました。しかし祖母にとって当時の生活は、決して快く思い出させるものではありません。戦争によって、多くの人達が恐怖と貧困の中で生活を余儀なくされたというのが事実です。

現代に生きる私達は、当時の生活から儉約の精神を教訓として見習い学びつつも、今ある生活が平和の上に成り立っていることも自覚しなければなりません。そして、平和の大切さを、深く理解しなければなりません。戦争は二度と繰り返してはいけないと思います。

祖父父母たちの太平洋戦争

「祖父の戦争体験」 中学二年 久門 拓

はじめに

僕は今まで戦争体験者の人に戦争の事を、聞いてはいけない気がしていたので、殆ど聞いたことはありませんでした。だからこの課題が出た時も「誰に聞いたらいいんだろう・・・」と迷ったけど、まずは身近にいる名古屋のおじいちゃんに聞いてみようと思い、教えてほしいと言ったら、すんなり快諾してくれました。

おじいちゃんの経験した戦時中

1、会ったことが無いお父さんのこと

おじいちゃんのお父さんは、太平洋戦争の前の、日中戦争の時、中国に出兵して昭和12年10月19日に江蘇省（上海の北側）で戦死しました。おじいちゃんは5人兄弟の末っ子で、お父さんが戦死した翌年に生まれたので、自分のお父さんの事について、まったく何も知らないのです。

2、小さい頃の思い出

岐阜の山間部で暮らしていたおじいちゃんの家は農家で、100%自給自足でしたので「お金は無いけど、食べ物には苦労しない」生活をしていました。だから、作った農作物はお金でなく「物」物々交換をしていたそうです。家の近くに、おじいちゃんのお父さんが山を切り開いて、造った防空壕がありました。広さは畳10畳ほどで、この付近にはこんな大きな防空壕はなかったので、友達と防空壕の中で遊んだそうです。空襲警報が鳴ると、家族で食べ物などを持って防空壕に避難したそうです。僕のイメージする「狭く、暑く、息苦しい」防空壕ではなかったので、全く苦痛ではなかったそうです。終戦が近づく昭和

19、20年には空襲警報が増え1日1回はあり、夜中にも避難したことがあったそうです。実際は、おじいちゃんの田舎の方には爆弾は一発も落とされず、南の多治見、西の御嵩の方が空襲されました。空襲警報の伝達方法は、役場に警報の連絡が入り、サイレンを鳴らして住民に知らせます。サイレンは山奥まで聞こえないので、聞こえない地域の人には、係りの人が電柱や櫓の上によら下げてある「半鐘」はんしょうを、金槌で叩き鳴らして全員に伝えておりました。

3、学校に入学してから終戦まで

おじいちゃんは現在69歳なので、小学1年生の夏に終戦を迎えています。短い間だけど、入学してからの5か月のことは、よく覚えていてるそうです。おじいちゃんは「上之郷国民学校」に入学しました。入った直後、先生が、戦死してお父さんがいない、おじいちゃんのような生徒（クラスで4、5人いた）に10円ずつ渡したそうです。当時のお小遣はお祭りやお正月は50銭、普段は20銭、30銭なので、10円はとても大金です「貰った時は嬉しかった」と言っていました。

朝礼は、いつも西の方を向いて並び、先生が「まわれ右」「東の方角を見て天皇陛下様に敬礼」と号令をかけ、1、2分間も礼をしていたそうです。給食はなく家から弁当を全員持ってくる制度でした。クラスは60人で、金持ち2人、弁当を持ってこられない子、5、6人など、いろんな子がいました。この時代にもイジメがあったようで、標的は弱い子やキタナイ子ではなく、金持ちの子で「弁当ちょっとくれ」と言って、弁当を持ってこられない子にあげるなど、今のような悪いイジメではなくて、むしろクラスの強い助け合い、絆があったからこそ、このような助け合いが出来たようで、金持ちの子の弁当は一人では食べられないぐらい持ってきていたようでした。おじいちゃん達は、軍用飛行機の燃料になるのだと教えられ「どんぐり」「桑の皮」「椿の実」などを拾って貯めて、兵隊さんに「使って下さい」と渡したこともしたそうです。

おじいちゃんの一番覚えていることは、学校にいたとき空襲警報になると、低学年は高等科2年生（今の中学2年生）に連れられて山へ避難しました。山には防空壕が無いので「伏せ」の号令で、全員地面に伏せて、親指で耳、残り4本の指で目をふさぐのです。爆弾はいつ落ちるか判らないので、ふさいでいる手を時々離す号令は「休め」です。これを何回も空襲警報中は繰り返すそうです。中でもおじいちゃんが忘れられないのは、低学年の「伏せ」のやり方が悪く、爆風で目や耳がやられるので、高等科2年生は低学年に「教え方が悪い」と言われて、先生に張り倒されたそうです。そういうのを見て、低学年のおじいちゃん達は、高等科の人達を尊敬したそうです。

4、レポートを作成しての感想

まず驚いたことはこんな身近な人で、戦争で家族を亡くしている人がいたということでした。しかもそれが僕のおじいちゃんや、おじいちゃんはお父さんに抱かれたことも、名前を呼んで貰ったこともなく、顔を見て貰ったこともないのでした。僕は本当に驚きました。日本は誰だろうと構わず人を集め戦場へ送り込んだと思うと悲しくなり、二度と戦争はやってほしくないと思いました。僕のおじいちゃんや、おばあちゃん二人共運良く、食べ物にも困らず、近くに爆弾も落ちず、小さい頃に戦争が終わったので、とても戦争に苦しめられたわけではないと思うけれど、もっと年寄りの人や爆弾が落とされた都市部の人々は本当に苦労したのではないかと思いました。

僕は今まで戦争について殆ど知りませんでした。しかし、こうやって直接話を聞いて、レポートにしてみても、戦争についてかなり興味を持ったので、また機会があれば他の人達の体験も聞いてみたいと思いました。

祖父父母たちの太平洋戦争

「祖母の戦争体験」 中学二年 三矢 明宏

1、はじめに

名古屋市に住む祖母は現在73歳です。私は祖母と会食をしながら、戦争中の食事、生活環境、当時の様子についての話を聞かせてもらいました。以下では、祖母から聞かせてもらった内容について述べていきます。

2、祖母の戦争体験

（戦争中の生活環境）

昭和19年、祖母が国民学校5年生の時、常滑市西浦小学校に、曾祖父の仕事の関係と疎開を兼ねて転校しました。その頃は、山間部の学校へ疎開し、両親と離れ離れになる子どもも多かったそうです。一方で、大人は仕事や家を守るという役割があるので、市内に残り、空襲で火事になれば水をかけて燃える家屋を消火することなどをしていました。消火は簡単には出来ず、火災で亡くなった人も大勢いたそうです。

愛知県は、軍の飛行機や兵器を作る多くの軍需工場があったため、B29爆撃機による空襲が多くありました。当時、小学5年生だった祖母より3歳位い年上の女生徒達は、勤労動員で働いていた軍需工場が空襲され、多くの人が亡くなったそうです。軍需工場を破壊すれば日本の戦力が落ちるので、軍需工場はよく空襲の標的にされたそうです。

当時の祖母の家は常滑市の海岸沿いにあったのですが、寝ようとした夜の9時頃、アメリカのB29爆撃機が名古屋方面に向かい、頭上を爆音を轟かせ

ながら飛んで行くことがよくあり、名古屋の空襲は夜が多かったと申しましたが、頭上を飛ぶのでずーっと防空壕の中に避難して怯えていたそうです。

「戦争中の食事」

祖母は常滑へ疎開しましたが、食料は配給所まで受取りに行かなければならず、配給所へ遅く着くと「サツマイモ」しか残っておらず、しかも一人一コだそうです。想像して下さい、家族が揃って楽しい食事が一人芋一コです。今のように品質改良されておらず非常に「まずい」芋のようでした。

祖母の母は疎開する時、名古屋の家に残し空襲で焼失しては困る大切な物も持って疎開しました。疎開した付近の人達には上等な品物ばかりを持っていた、その人達の食べ物と交換して貰いました。半農半漁の家も多く漁師が獲ってきた魚は、高級魚は軍や地元の有力者が持っていて、疎開者は雑魚を分けてもらったそうです。その他に食べれる雑草やイナゴを捕って食べたり、今思えば粗末な食事だったそうですが、常に空腹でしたので食事を粗末だと思ったことは一度もなかったと言っていました。当時は、みんなが粗末な食生活を強いられており、それに比べれば今の食事はとてもおいしいと言っていました。

「戦争中の社会の様子」

祖母が小学6年生になると授業勉強はなくなり、お母さんが自分の着物を解体して作ってくれた服を着て、藁草履に鍬を担いで学校へ行き、学校から決められた農家へ行って、その時で違いますが、麦狩り、田植え、畑や田圃の草取り、稲刈りなどをさせられました。農家の方がありがとうと言って、大根の漬物を下さり持って帰ると、お母さんがとても喜んでくれて、祖母はお母さんの笑顔を見るのがとても嬉しかったと言っていました。

戦争中の新聞は、日本が劣勢であることを隠し、日本は戦争で有利な状況であると報道していたそうです。新聞は「米英鬼畜」と書いて国民の敵国への憎しみを煽ったり、真実とは違う日本の優勢を報道して、国民の心を一つにして、戦意を高めるようにしておりました。日本の本当の状況を知っている人には、その事を口外させず、もし口外しようものなら、警察に逮捕され、ろくな裁判も受けさせずに処罰されたそうです。

祖母は小学6年生で「竹槍」「長刀」なぎなた」の練習をさせられたそうです。校長先生が「敵のアメリカ兵が本土に上陸して攻めてきたら、竹槍、長刀で戦え」と教えられたそうです。僕は思いました沖繩戦の実態を、戦車を盾に先頭にして動くものは火炎放射器で焼き払ったのです。そのアメリカ上陸軍に、小学6年の女の子に竹槍や長刀で応戦させるなんて、馬鹿げている。逃げた方がよほどましだと僕は思いました。そして昭和20年8月15日に天皇陛下の終戦のお言葉を聞いたときは、やっと電灯を明るくつけられる、もう防空壕に

逃げなくてもよいのだと思い、ホッとしましたそうです。

3、戦争体験を通して祖母が感じたこと

戦争は最悪なことで、力の無い庶民が一番辛い目に合わせられる仕組みで、多く死に、多く戦費を費やして、国は貧しくなり、多くの人達の家や大切な家族を失い、悲しいだけで、残ったものは何ひとつなかった。日本は戦争に負けてよかった。もし勝っていたら、その後更に多くの人達が犠牲にされたと思う。戦争に負けたことにより、本当に大切なものは何か、守るべきものは何かということに気付かされました。これから先の未来に生きる人達にも「昭和」という時代をしっかりと見つめて生きて欲しいと思います。

4、祖母から戦争体験を聞いて私が感じたこと

今回、祖母から戦争の話聞いて、戦争の時代の厳しさと戦争の最悪さを感じ取ることが出来ました。今の学校で、私達は勉強や部活に当り前のように励んでいます、それが叶わない時代もあったのです。私達は平和の大切さを理解し、今の恵まれた環境に感謝するべきだと思います。そして、今、健康で命があることに、感謝していきたいと思います。

祖父父母たちの太平洋戦争

「祖母の戦争体験」 中学二年 浅井 奈都美

1、はじめに

以前、祖母から広島原子爆弾投下についての話を聞いたことがあります。私は、今回のレポートを作成するに当たって、祖母から聞いたことを思い出しながら、原子爆弾投下をもたらす被害について自分で詳しく調べ、理解を深めていこうと思いました。

2、祖母の戦争体験

私の祖母は、現在70歳です。子どもの頃は広島市の近くの瀬戸内海の小島に住んでいました。その当時は戦争一色で、戦争に行く人は背中にも日の丸の襷を掛けて戦争に行きました。また戦争に行かない人達は、戦争に行く人を見送る日々でした。

原子爆弾が投下された時、祖母は8歳でした。8月6日は学校へ登校していません。まぶしい光が「ピカッ」とひかり、その後「ドーン」と物凄いい音がして、友達の中には、その光を暫く見ていた人もいました。暫く見ていた人の中には、後に目が見えなくなってしまう人もいたそうです。祖母は直ぐに目を閉じました。原子爆弾が投下された直後は家に帰ることが出来ず、暫くのあいだ親戚の家に預けられることになり、とても寂しい思いをしたそうです。

3、原子爆弾がもたらす被害

「熱線による被害」

原子爆弾が爆発した直後、5000度にもなった火の玉は、爆心から600メートル離れたところでも2000度の温度でした。そのため、爆心から1、2キロメートル以内の遮るものがない所で熱線を受けた人は、皮膚が焼き尽くされ、体内の内臓まで損傷され、殆どの人は即死しました。また熱線により自然発火した火などから起きる火災により、生きながら焼かれてしまった人達もたくさんいました。このような高温と火災のために爆心地周辺で被害にあった多くの人達は、皮膚は焼けて垂れ下がり、水を求めて人々が川に殺到し、川岸には幾重にも人々の死体が折り重なっていました。

「爆風による被害」

爆発の瞬間に発生した衝撃波によって、秒速440メートルといわれる爆風が多くの人々を吹き飛ばし、また、爆風によって倒された建物の下敷きになったり、瓦礫に押し潰されたりして、多くの人々が亡くなりました。爆風は、建物の窓ガラスを破り、その破片は人々の体に突き刺さりました。最近になっても、体調不良を訴える被爆者の体内から、ガラスの破片が取り出されることもあるそうです。

「放射線による被害」

爆発して1分以内に「初期放射線」が大量に降り注ぎました。爆心地から1キロメートル以内で、直接、放射線を受けた人は、そのほとんどが亡くなりました。その放射線の量は、通常、1年間に人体が受ける自然放射線の4万倍の量に相当します。急激に強い放射線を受けると、細胞や血液を作る機能が破壊されたり、臓器の障害、免疫力の低下、毛が抜けてしまうなどの急性障害が現れます。被爆直後には大きな障害はないと思われていた人が、数か月後に発症し、死亡してしまっただけの報告されています。

更に残留放射能（地上に残った放射能）により、救護活動や肉親を捜すために爆心地近くに行つて被爆し、病気になったり、亡くなったりする人も多くいました。また、爆発後の火災によって、強烈な火事嵐や竜巻が起こり、それによって巻き上げられた埃などで雲ができ、広島市の北西部の地域に「黒い雨」が降りました。「黒い雨」には誘導放射能を受けたススや埃が含まれていたため、放射能の影響は広い地域に及びました。川や池の魚がたくさん死んだり、井戸水を飲んだ人は、その後3か月にも及ぶ下痢をしたと、いわれています。

3、レポートを作成して思ったこと

毎年、原爆投下日に広島島の原爆ドームがテレビに映り、その映像を目にします。今回のレポート作成で、原子爆弾のもたらす被害について調べ、その破壊力の残酷さに愕然としました。そして、現在も原子爆弾による後遺症で苦しん

でいる方々が多くおられることも知りました。最近の日本では、自殺をする人の増加が社会問題になっています。しかし、戦時中は、生きたくても生きられなかった人達が沢山いました。その事を考えると、今の時代を生きる私達は、命の大切さをもっと理解しないといけないと思います。

また、戦時中の人達はとても貧しい暮らしをしていました。白米をお腹一杯食べることなど、出来なかったそうです。それに比べれば、今の私達の生活はとても恵まれています。そのことを当たり前だと思わずに、今の平和で恵まれた生活に、感謝する気持ちを持つことが大切だと思います。戦争は絶対に繰り返してはいけません。

祖父父母たちの太平洋戦争

「祖父母の戦争体験」 中学二年 大谷 香織

1、はじめに

今回、祖父母から直接戦争体験を聞かせて貰うことが出来ました。戦争体験について尋ねると、祖父母は詳しく話を聞かせてくれました。

2、戦時中の生活のようす

当時の生活は、今のようパジャマや布団やベットなどもなく、1日の殆どを縁の下に掘った防空壕で過ごしました。防空壕とは敵のB29爆撃機から投下される爆弾から身を守るために地面を掘って作られた穴で、穴掘りは子どもも参加しました。学校は小学1年生から6年生まで殆ど授業がありませんでした。毎日の生活の中で、空襲警報が鳴ると、全員防空壕へ逃げ込みます。時々空襲警報の知らせよりも爆撃の方が早い時もあり、みんな助かりたいために必死で生きていました。昼も夜も空襲で寝間着を着て寝る事は出来ませんでした。

3、戦時中・終戦直後の食事について

「戦時中の食事について」

当時は、田舎にも都会にも食べるものがなく、家の庭の植木などを引き抜いて畑にし、麦・サツマイモ・カボチャなど食べれる作物を耕作しました。農作物のツルや葉も全部食べました。食べ物を料理する時は、実よりも水を多く入れて量が増えるよう料理して食べました。

「終戦直後の食事について」

戦争に負けて、食料の配給制度や諸物資の統制が崩壊し、お金よりも「物」がお金以上の価値、力を発揮をするようになりました。食料の配給は40日も60日もなく、都会の人達はお金よりも、衣類や高価な品物を持って農家で食べ物と交換して生き延び、戦争に負けて失業者が出て、家は空襲で燃え、親が

空襲で殺され子どもは学童疎開で助かった戦争孤児がホームレスになり、餓死や行路死が多く出ました。祖父母たちのご両親は子ども達に食べさせようと必死の努力をして、食べ物を探し回ったようでした。当時をよく考えて下さい、40日も60日も食べ物の配給が無いので、自分達で食べる食料は自分達で探して食べていたのです。

4、戦時中の街の状況

「名古屋のようす」

昭和20年5月14日、名古屋市東区にあった三菱重工兵器工場がB29爆撃機による攻撃を受け、たくさん爆弾と焼夷弾により、たちまち火の海となりました。焼夷弾とは家屋などを焼き払うために、高熱を発する爆弾です。焼夷弾は一つではなく、束になって落ちてきます。道路に落ちても火柱が高く広く燃え広がります。この日に名古屋城も燃え落ち、熱田区にも大きな被害が出ました。

「豊橋のようす」

直径10センチ、長さ50センチ位の焼夷弾が民家に集中的に投下され、油が飛び散って、その油で家屋が全焼してしまった。防空壕のない頃には、夜間に爆撃機が飛来すると、近隣の住民は先を争って安全な地域まで逃げて、隠れました。市民の顔はみんな不安で一杯でした。昼は艦載機が飛来し低空で攻撃してきました。豊橋は軍隊の18連隊があり、隣の豊川には海軍の兵器工場があったため、アメリカ軍の攻撃の標的になっていたと思われまふ。投下された爆弾の破片が飛び散って、回りの木の幹に突き刺さっていたこともあり、夜の街が火の海につつまれたときは、遠くからもその炎を見ることが出来るほどでした。

「三重のようす」

当時の電車は単線であったため、上りと下りの電車が一つの駅に揃ってから行き違いをしていました。アメリカの飛行機はその時を狙って攻撃をしてきました。三重は名古屋を攻撃するB29爆撃機の通り道になっていました。三重はB29の被害はあまりありませんでしたが、艦載機という飛行機により海軍が攻撃されました。艦載機は低空から海軍基地を攻撃しました。

5、祖父母から戦争体験を聞いて感じたこと

祖父母から戦争の話聞いて、やはり戦争は二度としてはいけないと思います。たった一度の戦争で、多くの尊い人命が失われるなんて、とても残酷だと思えます。爆弾を落とす人達は、どんな気持ちで爆弾を落としたのでしょうか。私にはその気持ちは絶対に分かりません。分かりたくありません。祖父母の話から、戦時中や終戦直後の生活の大変さが分かりました。戦争はもう二度と繰り返してはいけないと思います。

6、戦争レポートを作成して

今回のレポートを作成するにあたって、初めて祖父母から戦争の話を聞きました。学校の授業や教科書の勉強だけではあまり分らない、戦争の恐ろしさや残酷さを感じ取る事が出来ました。戦争の頃は貧しく、今の私達が当たり前だと思っている生活が出来なかったのです。今の私達の生活がどれほど裕福かを実感することが出来ました。これからは自分の普段の生活を、少し見直して行こうかなと思いました。

祖父父母たちの太平洋戦争

〔祖母の戦争体験〕 中学二年 松田 奈穂美

1、はじめに

私の祖母は、愛知県一宮市に住んでいます。太平洋戦争中の生活や食事の様子などについて聞きました。

2、祖母の戦争体験

「戦時中の学校」

学校では、大阪などから疎開してきた学童が多く、午前と午後の授業に分けられていました。今の学校での社会問題となっているようなイジメはなく、誰もがお互いに生きるために協力していました。運動場は畑にして豆や芋など食料になる植物が植えられていて、今では当たり前のように行われている運動会も出来ませんでした。また、今の私達が勉強している9教科の授業はなく、田圃に連れられて行かされて、稲刈りなどをしていました。

「祖母の戦争体験」

空襲警報が出ると、阿古井という所にある神社へ走って、そこにある防空壕に避難しました。警報が解除されて防空壕から出ても、生きた心地がしませんでした。祖母の家に疎開していた人が持っていたラジオで、天皇陛下が日本の降伏と終戦を告げた時、疎開していた人は「私達はアメリカ兵に殺される」と言っていました。それはその人の思い込みでした。

祖母の父は、祖母が4歳くらいの時に戦争に行きました。年齢がそれほど若くなかったから、マレーシアで鉄道関係の仕事をしていたそうです。そして、終戦を迎え、祖母の父が帰ってきた時には、祖母は9歳になっていました。だから、帰ってきて初めて名前を呼ばれた時、しばらく誰なのか分からなかったそうです。祖母は父の顔を忘れてしまっていたのでした。それだけ長い年月が流れていたでしょう。また、父方の祖母の方は、兄が戦死したと聞きました。戦争とは大切な家族を引き離す、とても残酷なものだと思いました。

「戦時中の食事」

白いご飯は少ししか食べることが出来ず、サツマイモのツルやカボチャなどを煮て食べていました。学校へ持って行く弁当は、少しのご飯とサツマイモ、そして梅干し1コでした。当時は食べ物はありませんだったので、これくらいのお食べ物でも美味しいと感じたそうです。

3、本を読んで思ったこと

私は『夏服の少女』という、広島に原子爆弾が投下されることを知らず、戦時下で明るく生きる少女達の姿を描いた物語を読みました。まず、学校の時間割りを見たら、体育や家庭科（裁縫）はあったけど、5教科があまりなく、かわりに労働とか畑を耕したりする授業があること、そして、そう簡単には教科書が手に入らないことが分かりました。新学期が始まるとすぐに教科書が配られ、9教科の授業が始まる今の学校とはまったく違っていて驚きました。もう一つ驚いたのは、その少女達の底抜けの元気さでした。

その本には「彼女は学校へ行く時、いつもきつい峠を歩いて行きました」と書いてありました。当然、当時は親が戦争に行ったり働きに出ていた時代です。車などで送ってもらえないし、戦時下だから自転車もないです。しかし、その子は足に豆が出来ても、雪が降り道が凍って滑り易くなっても、その峠を越えて学校へ通っているのです。戦時下なのに、どうしてそれほど元気なのか、直接本人に聞いてみたいくらいの気持ちになりました。そして運命の日、8月6日、広島に原子爆弾が投下された日です。本の中には、少女達が必死に逃げようとして、喉が渇いているのに、被爆による火傷のために水を飲ませて貰えずに死んでいきます。

こんなひどい事があるのでしょうか。なぜ無関係な人達が、尊い命を捨てなければならぬのでしょうか。前日まで元気な姿を見せていた人が、どうしてこの日になって、ひどい火傷を負って砂浜に倒れているのでしょうか。私は本を読み終えて、とてもせつない悲しみと怒りで胸が一杯になり、今にも破裂しそうなくらい心が痛みました。

4、レポートを作成して

私が太平洋戦争当時の日本の偉い人に聞きたいのは「なぜ、何のために戦争をしたのか」と言うことです。お金のためでしょうか。あるいは領土を手に入れるためでしょうか。教科書を見ると「アメリカが石油や鉄の輸出を禁止し、インドシナと中国からの日本軍の撤退を要求したため、日本は戦争を決意した。」と書いてあります。私には、この頃の日本の財政がどうであったか、そういうことは分かりません。しかし植民地を増やし、資源を確保することが、多くの尊い人命を奪う正当な理由になるのでしょうか。そのために何百万人もの人

達が尊い命を落としていったのです。

戦時中は「お国のためなら命を落としてもよい」と考えられていたそうです。しかし国のためであれば、尊い命を捨ててもよいのでしょうか。私は、尊い命を捨ててもいいなどは、一時たりとも考えてはいけなと思います。神様から授かった命、両親から授かった命を、私は大切にしたいと思います。そして、今この時代に生きる全ての人達に、自分の命を大切にして生きて欲しいと思います。

広島市の原爆投下と 沖縄のひめゆり部隊 （現地を訪れて）

中学二年 富田 志織

1、はじめに

私は、一昨年の夏に広島平和記念公園（原爆ドーム）へ、昨年の夏は沖縄の「ひめゆりの塔」へと、太平洋戦争の被災地へ訪れました。被災地に残った建物や資料館で見たこと聞いたことの全てから、大きな衝撃を受け、平和について考える貴重な機会を得させて貰う事が出来ました。そこで、これらの被災地に行った体験を、今回はレポートとしてまとめようと思いました。

2、広島市の原爆投下と広島平和記念公園を訪ねて

2006年（平成18年）北朝鮮からミサイル（テポドン3号）が発射されるという事件がありました。そこで、平和の大切さを学ぶために、2006年8月14日に広島平和記念公園内にある平和記念公園へ行きました。

① 原子爆弾の開発から広島への投下まで

第二次世界大戦が始まった1939年（昭和14年）アメリカは原子爆弾の研究に乗り出しました。1942年（昭和17年）には、「マンハッタン計画」と名付けられた原子爆弾製造計画に着手し、3年後の1945年（昭和20年）に原爆実験に成功しました。日本は戦況が圧倒的に不利であったにもかかわらず、なかなか降伏しませんでした。アメリカは、戦争終結のための手段として原子爆弾を使用しました。

原子爆弾投下により戦争を終結させることができれば、戦後のソ連の影響力が広がるのを回避でき、同時に、膨大な経費を使った原爆開発を、対国内的にも正当化できると考えていたからです。また、開発者が正確に原爆の効果を測定しなかったということも、理由の一つとして挙げられます。アメリカが広島に原爆を投下した理由は二つありました。一つ目の理由は、原爆自体の威力を

正確に測定するために都合のよい、あまり空襲の被害を受けていない直径3マイル(約4・8キロメートル)以上の都市という条件を広島が満たしていたことです。二つ目の理由として、連合国の捕虜収容所が広島には存在しないと考えていたことが挙げられます。そして、1945年8月6日の午前8時15分に、原子爆弾は広島に投下されました。

② 広島に投下された原子爆弾

原子爆弾は、ウランとプルトニウムが核分裂するときが発生するエネルギーを兵器として利用したもので、広島に投下された原子爆弾は、全長3メートル、重さ約4トンもある巨大な爆弾でした。それにもかかわらず、開発当初の設計よりも全長を縮小していたことから、リトル・ボーイ(少年)と呼ばれていました。(長崎に投下された原爆はファットマンと呼ばれた)この原爆の中に、約50キログラムのウラン235が詰められていたとされ、このうちの1キログラムにも満たないものが瞬間的に核分裂し、高性能爆薬1万6000トン分に相当するエネルギーを放出しました。

③ 原子爆弾による被害

原子爆弾は、市街地の上空約600メートルで目くらむ閃光を放って炸裂しました。その瞬間に爆風が吹き、人々は吹き飛ばされ、爆心地から2キロメートル以内にある殆どの建物は破壊されました。また、爆発した時に強い熱線が放出され、火の玉となり、火の温度は5000度にもなった。爆心地から260メートルの場所にあった石段が資料館に展示されていました。その石段には人が腰掛けていたそうですが、被爆後には肉も骨も残らずに人が腰掛けていた部分だけが影のようになって石段の表面に焼き付いて残ったそうです。

また、原子爆弾の爆発の際には、通常の爆弾では絶対に起こらない放射線による被害が多く出ました。特に、爆心地から1キロメートル以内にいた人は、致命的な影響を受け、その多くは数日の内に死亡しました。更に、爆発後20分から30分後に降った「黒い雨」には、放射能がたくさん含まれていて、広い範囲に被害がもたらされました。資料館には、焼け焦げてところどころ布がない服や、中のお米が全て炭になってしまった弁当箱なども展示されていました。かろうじて生き残った人が、焼け焦げて血みどろになったぼろぼろの衣服をまとい、燃える瓦礫の中を逃げまわっている様子を写した写真もありました。

④ 広島平和記念公園へ行っての感想

「人類は核兵器とは共存できない」と強く思いました。実際に資料館での展示を見ると、教科書で読んでいるのとは比べることができないほどの大きな衝撃を受けました。トマトが食べたいといいながら亡くなっていった「みちこさん」の話は、聴いていて辛かったです。絶対にこのような悲劇は繰り返してはいけない、そう感じました。「ノーモアー ヒロシマ ノーモアーゲンバク」

と、世界に呼びかけたいです。

3、沖縄の「ひめゆり部隊」へひめゆりの塔を訪ねて

2007年(平成19年)7月29日に、私は、沖縄県糸満市にある、ひめゆりの塔と、ひめゆり平和祈念資料館へ行ってきました。目的は、日本で唯一地上戦があった沖縄で、平和の大切さを学ぶことでした。

① ひめゆりの青春

「ひめゆり」の愛称で親しまれていた沖縄師範学校女子部と県立第一高等女学校。この二校では、当時としては珍しいセーラー服が制服とされていて、あこがれて入学してくる女子も多かったようです。1930年代(昭和5年)から長引く戦争により、学園は次第に軍事化されていきました。今の私達とほぼ同じくらいの年齢の女の子達の青春が、戦争色に塗り変えられていきました。セーラー服も次第に簡素化され、最後には「もんぺ」になりました。教育では、教科書でも戦争の物語が多くなってきました。

② ひめゆりの戦場

1945年3月23日に、ついに米軍の沖縄上陸作戦が開始されました。ひめゆりの学園から240名が戦場に動員されました。場所は南風原の野戦病院である沖縄陸軍病院。ひめゆりの少女達は、野戦病院の看護要員として動員されました。野戦病院といってもそこは蟻の巣のように張り巡らされた洞窟(沖縄には洞窟が多い)の中に、二段ベットが置かれただけの施設でした。

やがて、持久戦になるにつれ、病人や怪我人が多くなり、学生達は睡眠も取れない状態になっていきました。また、医療器具が不足するようになってくると、手術の際に、麻酔を使わないで手足を切断したりもしました。野戦病院の中には血生臭い臭いが漂い、学生達は死者の埋葬も行うようになりました。また、食料倉庫が病院の洞窟から離れた場所にあったため、食料を取りに行く途中、米軍が撃った弾が当たることもあり、命がけだったようです。

③ 解散命令と死の彷徨

アメリカ軍が真近に迫った1945年6月18日の夜、突然、「解散命令」が出されました。学生達は絶望的な気持ちの中、アメリカ軍が包囲する戦場を逃げ惑いました。当時ひめゆりの学生であった恭子さんの話によると、もう米軍に捕まると思った瞬間、一つ上の先輩から、「米軍に捕まるぐらいなら死んだほうがまし。私は自分で死ぬ勇気がないから、恭子ちゃん、私を殺してちょうだい。」といって、ナイフを渡されたそうです。

米軍からの砲弾やガス弾で亡くなった人もいましたが、手榴弾などで自決して自ら命を落としていった人も多かったそうです。陸軍病院に動員された24

0人中の136人の方が亡くなりました。

④ ひめゆり平和祈念資料館に行つての感想

今の私達と同じくらいの年の子達が、これほど過酷な生活をしていたなんて信じられませんでした。しかし、資料などを見て、「過去に現実こんなことがあったんだ」と思いました。「悲惨な戦争を絶対に繰り返してはいけない」と思いました。

今の私達には、生活の中で、「死と隣り合わせで生きている」という感じはありません。しかし、戦争中の沖縄の学生達は、何をするにも命がけでした。私達は、今が平和であることが何よりも幸せなことだと自覚しなければなりません。

4、全体を通しての感想

今の日本は裕福で平和な国です。しかし、この平和は、戦時中の苦しい思いの上に成り立っていることを覚えておかねばならないと思います。今でも世界では、絶えず戦争や紛争が起っています。戦争を体験し、苦しい思いを味わった国である日本には、率先して「戦争反対」を世界に対して呼びかける責務があると思いました。

三

広島市民らの

無念の慟哭が

豊明市 橋詰 四郎

(無職 73歳)

私は昭和十九年末に、軍都「広島」から中国東北部の関東軍第六国境守備隊に向けて出発した。

夜も明けず暗いのに、部隊の行進に合わせて道端の家々には明かりがともり、広島の人々は街路樹や電柱に身を隠して、戦地に向かう私たちに無言で合掌、揮ひ姿があった。これを見たとき、この人たちのためになら死ぬる、と私たちは死ぬ決心と覚悟を自身に言い聞かせた。

八月十五日の敗戦も知らず二十一日まで、強力なソ連戦車軍団と死闘を繰り返

した。戦争が悲惨なら、シベリアでの抑留生活は地獄だった。平和になってからシベリアで五万五千人以上の仲間が死んだ。

昭和二十二年、地獄から生還して知ったのは、私たちのために押んでくれた広島悲劇だった。上空で爆発した、たった一発の原爆が広島を壊滅させ、十四万余の市民を殺戮した。

犠牲者はその後も毎年増え、昨年八月六日の慰霊数は二十万二千余人に達し、今年も慰霊名簿に四千九百二十七人が新たに書き加えられた。

戦後五十三年、核反対の私に「犬の遠吠えだ」と冷笑する人が現れた。彼らは、あの死者たちの慟哭が聞こえないのだろうか。

1998年(平成10年)8月22日 土曜日 享月

広島原爆と被爆者「軍医の記録」

肥田 舜太郎

私は事情があって1942年（昭和17年）9月、25歳のとき医科大学在学中に召集され、歩兵一兵卒として岐阜の連隊に入隊し初年兵教育を終え、高学歴のため幹部候補生として豊橋予備士官学校に回され、サイパン島守備隊歩兵小隊長になるための将校教育を仕込まれていた。

軍隊は上官の命令は天皇の命令と同じの想像を絶するタテ社会の中で、私は不覚にも上官に「欠礼」してしまった。欠礼は上官反逆侮辱罪で重罪だ。待っていたとばかりタテ社会を益々徹底的に引締める大事件にされてしまった。この事件で士官学校長閣下は私が医学部在学中であることを知り「軍医になれる者を歩兵で殺すのか」と怒り、副官に私を軍医にさせる方法を考えよ。と命じた。

副官は私に私の意思で「軍医委託生を志願し、合格すれば召集を解除し母校に帰り復学卒業後軍医学校を経て現役軍医になる」職業軍人の方法を示し、私は軍医委託生を受験合格したので召集を解除され母校に戻った。母校は私の兵役中も就学扱いにしたので軍隊にいる間に欠席卒業扱いにされ、軍医学校へ回され戦地での戦傷治療、防疫給水などの実務訓練を受け、1944年（昭和19年）8月、軍医学校卒業と同時に生まれ故郷である本籍地の、広島陸軍病院に現役軍医として任官した。豊橋予備士官学校での仲間はサイパン島へ派遣され、降伏は禁じられているので全員が玉碎して果てた。

陸軍病院ではいきなり軍隊組織の不合理な非情性に直面した。戦地から運ばれてきた兵士達は、傷や病が軽快治癒と診断され退院と同時に原隊復帰と称し、出身部隊へ直行するのである。某軍曹の所属部隊は全滅して、所在不明の状態なのに、私の治癒診断により軍曹が後送された時点の部隊所在地へ直行を命じられ、軍曹は行方不明の全滅した部隊をさまよい探す彷徨の旅を強いられるのである。医師本来の使命、命を救って、救った命を再び死地へ追い帰す矛盾に戦争という巨大な「悪」の本質に改めて慄然とした。この巨大な悪の内側に在籍している私はいつしか虚しさを感じ「虚しい」と、漏らすようになった。

1945年（昭和20年）3月、私は咯血を繰り返す重症兵士の気胸治療に悪戦苦闘していた。胸壁を貫いた気胸針が真空の肋膜腔内に入り、気胸器からの空気が音を立てて入り始めた瞬間、演習空襲警報が鳴り響き「全員退避」の放送と号令が方々から聞こえてきた。が、中断したら兵士は間違いなく死ぬので、私は覚悟を決め送気続けた。「退避せんか」怒号と一緒に数人の査察官将校が手術室に入ってきた。私の指先は動かせないのだ。怒った査察官将校の一人が私の肩を掴んで強く引っばった。患者が何か叫ぼうとした口から大量の

鮮血が噴き出た大咯血である。直ちに脈をとったが脈圧はみるみる低下。「強心剤」と私は大声で指示し、看護婦が素早く注射する。威張っていた数人の査察官将校は一人二人と静かに後退りしながら手術室から出て行った。

空襲警報退避演習の講評は「退避を怠った軍医の行為は命令違反である。軍医が警報を演習と甘く判断したため実戦なら爆死していたであろう。」と厳しかったが命令違反は不問のままだった。

病院にはそれぞれ病院独自の特色があるようだ、広島陸軍病院の特色はチフスと赤痢感染予防が有名である。戦地への増援部隊が多数待機し、その感染予防は広島陸軍病院の病理試験室に負わされていて、その功績者は私の部下である優れた細菌学者、近藤見習士官である。彼の同期は既に少尉、中尉へと進級しているのに彼は無頓着に振る舞い、彼独自の細菌検査システムで優れた成果を挙げているのだ。彼には軍隊の階級も星の数も無縁の仁術医と思えた。

公用外出の外出先で私は憲兵少尉から「貴官の部下である近藤見習士官について話が聞きたい」と言われた。彼は特高警察の監視下にあったという風評があり私は「師団に正式に手続きをされてからにして戴きたい。部下の一人上のことについて無責任に発言したくありません」と丁重にお断り、憲兵は「妙な庇い立てをする」と貴官にも類が」と、型通りの脅し文句をあげてきたが、私は彼には何も話さなかった。

1945年（昭和20年）3月、近藤見習士官は軍医少尉に進級し、病理試験室主任に任命され私は祝いの酒席を設け、始めて二人だけで話し合う場になった。彼は彼なりに私を観察していて、私が職業軍人の道を選んだのがいぶかしいと言った。私は自分の意思でなく「欠礼」事件から軍命令で職業軍人への経過を話したのが導火線になり、思いかけず、近藤少尉の戦争に対する鋭い分析を聞くことになった。

『戦争は天災でなく特定の人達の長い計画と準備の末、実行される人災です。その過程に多くの団体や個人や利害得失が絡まりあって、最後には誰もが本気で望んではいなかった戦争が始まってしまうのです。その成り行きに自分がどういう考えや行為で手を貸すことになってしまったのか、そこをハッキリさせないで戦争に疑問をもったり、抵抗しても結局は自分に返るのでは』と、言い切った。

日本への空襲は激しくなり、敵機を撃ち落とせないのも、各家、隣組、町内会、会社、工場は自己防衛に防空壕を掘った。広島陸軍病院も戸坂村の山腹を掘り地下病院建設と決まり、5月から私は作業隊長になり90名の作業兵と同村に駐留し約100坪の地下洞窟を堀削した。広島陸軍病院間とは定期的に連

絡下士官が文書、手紙などを届けていた。ある日、病院から私宛に無署名の分厚い封筒が届いた。開封すると部下、近藤少尉からの書簡であった。

『上官殿は誠実に任務を遂行しながら、よく「虚しい」と言われる。理不尽な命令にも、ある時は精神主義で、ある時は合理的に全力で対応される上官殿の努力が真剣であればあるほど、虚しさが蓄積したはずです。それは他国を侵して己の欲望を満たす侵略戦争という最高の理不尽に目をつぶり、派生する枝葉の理不尽に引き回される虚しさだったとは思いませんか。上官殿は病院の試験室で伝染予防の仕組みを学ばれた。私達が万を越す軍隊の伝染病を予防し得たのは、病原菌の属性と患者の病態が解明されていたからです。伝染病には正しく対応できる私達が、戦争という社会の疾病に対してかくも無力なのは何故でしょう。

今次の聖戦を侵略戦争だと阻止しようとした勇氣ある人達がこの国にいる事実を、上官殿にも是非知ってほしいと思います。この人達のほとんどは獄に繋がれ、または、口を閉ざして身を潜めています。医学を興した先覚者が迷信と闘って伝染病を克服したように、獄に繋がれ、目になった先覚者の思想と勇氣がみんなのものになる日が来ないと誰が言えましょう。

今は一日も早く、勇氣を持って降伏すべき時と確信します。戦争を二度と行わない国にするため、上官殿には何としても生き残ってほしい。死に急がないで下さい。』

読み終わっても足の震えが止まらなかった。論旨は激しく胸を騒がせたが、受け止めようにも戦争はあまりにも大き過ぎた。何度も何度も読み返し脳裏に記憶させ畳み込んでから「灰」にした。8月5日、帰還命令を受け、作業隊は戸坂村から広島へ引き揚げた。その夜、深夜に戸坂村に危篤患者発生し、私は叩き起こされ緊急往診のため戸坂村に向かい応急処置。民家に一泊した。

翌8月6日まぶしいばかりの晴天。前夜の患者を診察中、閃光、灼熱感を肌我感到、爆風来り家屋倒壊、下敷きになる。崩れた家屋から脱出し、患者を掘り出す。広島の蒼空に立ち上る巨大な火柱を見る。一瞬何が起こったのか判らなかったが大変なことになったことは確かだ。

自転車を無断拝借し急いで病院へ向かう。川向こうの猛火は橋にまで及び、橋は渡れぬので川に入り渡河。対岸に近づくと炎と火勢に煽られた人々が、我先に川に飛び込む火傷者の大群衆で岸に上がれず、しばらく水中でためらっていたが群衆は増え次々川に飛び込むので、病院を諦め川を溯って戸坂村に戻る。家も小学校も倒壊し、運動場、道路、広場に血みどろの負傷者が大勢倒れ、既に死んでいる人もいる。押し寄せる被災者の受入れ態勢作りが急務だ。折よく3人の医師が来合わせたが、薬剤も医療資材もなく、村を埋める重症の負傷者になす術もなかった。

『ピカ』3日頃から市民に奇妙な症状が現れる。高熱、嘔吐、下痢、あらゆる粘膜から出血、口内壊疽、紫斑、脱毛など、後に急性症状といわれた症状で、最後は吐血、下血で死亡した。そのうち爆発後遠隔地から復興、肉親捜しで市内に入り『ピカ』を浴びなかった人達にも同じ症状が現れ死亡者も出ると、誰もが伝染病と疑い風評が市民を恐怖のどん底へ追いやり、医師達も不安と恐怖におののいた。広島で働いていた夫を探しに松江市から婦人が13日広島に来て、負傷者の収容先を一つ一つ探し歩き一週間目に戸坂村の収容先で探し当てた。婦人は疲れからか発熱しやがて急性症状で苦しみ始め、二週間目に黒髪が抜け出し、抜け落ちた黒髪を鮮血で染め息絶えた。伝染病以上の恐怖である。

12月、戸坂に収容されていた被爆者は山口県の病院に移されたが、年を越しても原因不明の死亡者が続いた。また、故郷へ帰った被爆者達も多くが「ぶらぶら病」と仮病名で呼ばれた「倦怠感」を主訴とする「奇妙な」症状に苦しめられ、病名がつかぬまま死んでいった。戦争に負け日本は米軍占領下に置かれ、日本政府も医療界も「原爆被害はアメリカの軍事機密」との制約のもとで、被爆者の救済、医療に二の足を踏み、放射線被害の調査、研究は一切おこなわず、「内部被爆は無害」とする含意に追従しての無関心のまま経過した。

後年、1975年(昭和50年)私はアメリカで、原爆投下後に広島市、長崎市に入った人達の不可解な症状は放射線内部被爆の被害と教えられた。これは私が目に見えぬ、撒き散らかされた残留放射能に怯え、市民が伝染病と恐怖した二次被爆である。例えば戸坂村と山口県の病院の約1500人、西荻窪診療所と埼玉行田診療所の約1000人、埼玉浦和診療所と同協同病院の約2000人、被爆者相談所の約1500人、計約6000人の新患被爆者を私は延べ4400週間診てきた。内部被爆を含め、救い得たと思える被爆者は数えるほどしかない。残念ながら最後に『癌』でとどめを刺すのが『放射能』である。

広島・長崎の原爆被害はまだ終わってはいないのである。それは劣化ウラン弾に引き継がれて、湾岸戦争、コソボ紛争、イラク戦争で将兵と住民に多大な犠牲者をつくり出しているのだ。一方、核保有国に於ける核兵器製造と保有のために働く労働者、関連施設周辺の住民は多大の被害を受け続け、また原子力発電事業は同じように労働者、周辺住民に眼に見えない『内部被爆』の被害を与え続けている。核兵器廃絶運動は「使用は不可、保持はよし」の核抑止論の根拠を奪い、人類絶滅の危機を防ぐ最高の平和運動である。生き証人の被爆者運動を支え、憲法9条死守と核兵器廃絶の力を「微力ながら私の体験談拙稿を使って」一段と盛り上げて戴きたい。

著書に「ヒロシマを生きのびて」(あけび書房)

「内部被爆の脅威」(ちくま新書)など。

戦争は愚かなこと「軍医の手記」

安岡 隆一

徴兵検査は乙種合格だったので軍隊へ行かず、引続き香川県高松赤十字病院に勤務していた1941年（昭和16年）26歳の時、召集令状が来た。8月某日、高知歩兵連隊に入隊すべしであった。覚悟をしていたので、平常通り仕事を終えたつもりであったが、カルテには幾つかの誤字があり、平常心のつもりでも心中乱れるものがあったようだ。

いつ頃できたか知らないが軍医予備員という制度があった。戦争の長期化により戦線が拡大し、一層軍医の増員が緊要となり、一般医師を軍の必要に応じて即座に軍医にしてしまう仕組みであった。当時は遅かれ早かれ男には召集令状が来るに決まっていたから、前もって病院勤務の間に丸亀歩兵連隊と普通寺陸軍病院へ出向き、軍医予備員の講習を済ませておいた。

医師が軍医になる経路はいくつかあるが、軍医予備員の他に短期現役軍医というのがあった。医学生が徴兵検査で甲種合格になると、帝国軍人の身分で在学の医科大学へ戻り、学び、卒業と同時に短期現役軍医として入営するのだ。乙種合格は予備兵として帰され、召集令状は来るなと願いながら市民生活をしていた。私の場合は「とうとう来た」かの乙種である。この他、職業軍人軍医になる仕組みもあるが割愛する。

召集令状で高知歩兵連隊に入隊。軍医の私には「寒地衛生要項」の冊子が渡され「そうか、北か」と行く方向が分かった。召集された大勢の兵達は玄界灘を船で渡り釜山に上陸、朝鮮半島を北上し満州（現中国東北）に入り、更に北東へ幾日も汽車に揺られ、夜は座席の下、網棚などを巧みに利用し眠り、昼間はよく歌った。「湖畔の宿」「影を慕いて」など、次々といろんな歌が出るが、軍歌は歌わなかった。我々の終点は『虎林』フリーン』であった。

虎林で軍病院でなく歩兵部隊の医務室勤務が始まった。平常は医務室、野外の演習があれば同行する。演習は対ソ戦を想定し爆弾を抱いて、戦車の下へ飛び込む人間爆弾であった。戦場ではないので、伝染病や事故がない限り平穩であった。それでも兵士であるからには、いつかは戦場で死ぬ思いはしていた。歩兵達の戦闘訓練が一通り終わった頃、部隊の一部兵士に移動の命令が出た。行き先は不明だが転出する戦友の強運を祈り、軍医仲間と送別の小宴を開いた。いつもは歌い踊って陽気な連中だが、ぼそぼそと話すだけで、だんだん声も小聲になり沈んでいく、話題を変え別の話しを始めても、また沈む。どうしても晴れやかな席にならず、不安な雲が覆いかぶさっているようであった。この虫の知らせか嫌な雰囲気、行き先も判らず出ていった彼等は、敗戦後に判明したのは全員サイパンで玉碎していたことであった。

1945年（昭和20年）4月、わが歩兵部隊は本土決戦防衛任務の大命を受け日本に向かうことになり、全員貨車輸送で釜山に向けて出発した。この頃になると誰が持ち込むのかは判らないが、アメリカ軍が絶対優勢で沖縄危し、本土決戦目前の情報が伝わっていて、私達は一日も早い本土防衛の任務に心が高ぶっていた。貨物列車は朝鮮半島をひたすら南下し、上り坂やカーブなので速度が落ちると兵士達の騒ぐ声が聞こえた。そう、走行中の貨車から朝鮮出身の兵士が飛び降り脱走するのだ。飛び降りた土地は彼等の祖国の土の上だ。私達は知らなかったが、君達にはもしかしたら日本降伏の情報が伝わっていたのだらうか。そうだとしたら私達は本土決戦の死に場所に向かっていたのだ。

釜山から船、兵も軍馬も大砲も詰めに詰めて、アメリカ潜水艦の攻撃もなく4月下旬敦賀に上陸、紡績工場の宿舎に泊まり、行き先は四国の太平洋岸と知らされた。我が家は四国は高知県の室戸だから太平洋岸だ。5月半ば頃、本土防衛部隊は高知県中央部の宇佐港（現「土佐市宇佐」）近くの山裾の陣地でアメリカ軍上陸に備えた。陣地は学徒動員で集められた学生諸君が構築していた。

生まれ故郷の高知県太平洋海岸に構築された、アメリカ軍上陸防衛陣地に配備され約3か月後の8月15日正午、天皇陛下下のラジオ放送があるから聞くようにの通達。ラジオを持っている農家の庭で聞いた。放送は雑音がひどく内容が良くわからなかった。が、どうも戦争は負けたんだと話しながら仮設の宿舎へ行く。暫くしてポツダム宣言を受託し、無条件降伏したと通報があり「ああ、命が助かった。」と安堵感が胸に広がっていくのを覚えた。

新聞はポツダム宣言の全文を報じた。その第9項に「日本国軍隊ハ完全ニ武装解除セラレタル後各自ノ家庭ニ復帰シ平和的且生産的生活ヲ営ムノ機会ヲ得シメラレルヘシ」また第10項には「…略…日本政府ハ日本国民ノ間ニ於ケル民主主義的傾向の復活強化ニ対スル一切ノ障碍ヲ除去スヘシ…略…」とあり気分が落ち着いた。

9月上旬、軍隊は解散。私は目と鼻の先に在る我が家にその日の内に帰宅した。父は私が軍隊で満州にいたとき他界し、私は父の死に目にも葬儀にも長男が出ていない。空襲から免れた小さな診療所に、母と弟、妹の3人が迎えてくれた。応召前に勤務していた高松赤十字病院を始め、四国四県の中心都市は全部空襲で焼き払われ、働く病院は空襲で消失し、父の残した診療所で医療を始め、軍隊に入る前から約束していた女性と結婚し、私達夫婦、母、弟妹の5人で新生日本への新しい生活が始まったと言いたいが、戦争の惨禍は国民が毎日生きていく、その日その日の生活は現在では想像も説明も出来ぬほど残酷で過酷なものであった。

即ち、空襲で焼け出された群衆が地方へ、戦争で親を亡くした戦争孤児のホ

ムレスが横行し、働き手を兵隊にされ荒れ果てた農耕地。軍需生産で日常必需品を生産しなかったしっぺ返しの物不足、敗戦の破綻で統制が無政府化し、食料、日用品の配給がなく餓死者が続出、そのため食料物資がお金以上の力を発揮し、混乱社会に拍車をかけた。それでも少しづつだが、民主主義と言う光明も見え始めてきた。

天皇制軍国主義の日本から自由・平等の民主主義へ、これは信じられない大きな変化であった。天皇制国家は民主主義を求める人々を「非国民」のレッテルを貼り逮捕投獄弾圧。国民は彼等とその家族に対し「アカ」と差別語で呼び、地域社会で苦汁な生活を強制し与えていたからだ。が、今度は敗戦により日本を占領したアメリカの方針も民主化なので拒絶することなく、すんなり受入れ自由・平等・多数決を称える民主主義が流行語のようになり、1946年(昭和21年)11月3日、新生日本の新しい『日本国憲法』が公布され、第9条に『武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない』とあり、もう戦争はしないのだ。以来62年間、戦争なき日本で平穏な生活ができた。戦争をしないということは、こんなによいことであったのか、暮らしの中での実感である。

憲法は『戦争放棄』だけでなく、基本的人権の保障、国民の自由と権利の保障、さらに国民の生存権と国の社会的任務等、大切な規範が記されている。戦争が終わった、もう召集令状は来ない。衣食窮乏の毎日だが、なんとなく安心していた。あれこれ考えるゆとりがでてきた。軍隊では、日々毎日追いまくられていて、何も考える余裕など微塵もなく、いつ死ぬかも知れないの思いが潜んでいただけであった。

子どもの時から戦争、戦争の日々だった。男子は軍人になり天皇陛下に忠義を尽くすことが、当たり前前の世の中であった。日清戦争、日露戦争、日本海海戦。台湾も朝鮮も戦争に勝って日本の領土になった。天皇に忠義の正義の戦争だから負けないのだ。男の子は兵隊になって戦争で敵の弾丸に当たって死ぬ時は、天皇陛下万歳と叫ぶ、これが一番親孝行で、天皇陛下がお喜びになる。学校では先生が「教育勅語」という書面をおごそかに読む、書面には天皇に忠義、親に孝行、兄弟仲良く、「一旦緩急あらば義勇公に奉じ」と難しい言葉もあった「戦争になったら戦いに参加して国と天皇のために一生懸命働きなさい」と言うことのようにあった。このように教えられて大人になり、兵隊になると「軍人勅諭」には「下級の者は上官の命令は天皇の命令と心得よ」と、命令は絶対守らなければ天皇陛下に不忠義になると叩き込まれていた。

現在ただ今、言葉巧みに「国益・愛国心・防衛」の三点セットで煽っている。戦争は愚かな、また何と罪深いかを過去を教訓として学んでいただきたい。

生体手術演習の実相「軍医の記録」

湯浅 謙

わが国には過去の戦争を顧みるという着想に乏しい。また、戦争で受けた被害は取り上げるが、与えた加害の事実はほとんど問題にされない。戦後62年、戦争の惨禍は既に「過去の事」として歴史から葬り去られてしまったのか、そうとしたら極めて危険な状態と言えよう。

昨年9月21日、日比谷公会堂で「戦争を語る集い」が開催され、老兵士と家族でほぼ満席となった。50人の老兵が生々しく悲惨な戦場体験、無法な戦闘計画を涙ながらに訴えた。「家族に伝えたい、聞いてもらいたい、話さなければ死ねない」との思いを語り、場内はシーンと静まりかえった。大層盛り上がったが、誰一人として犯した加害の体験には触れなかった。これは、慰安婦問題、南京虐殺、沖縄集団自決の軍閥与否定に見られるように、権力犯罪を隠蔽し、戦争の美化正当化を企てる政府の欺瞞政策の影響と思われる。

政府はいまだに731部隊の罪悪を公式には認めていないし、日本医学界も731部隊等の戦争犯罪を隠匿し、反省していない。昨春、大阪で開かれた日本医学会総会で、保団連（全国保険医団体連合会）は「戦争と医学展」の開催を申し入れたが、たった畳二枚分の展示場所が与えられただけだった。また、荏沼三氏が「15年戦争と医療研究会誌」（2006年）に、15年戦争中の731部隊の資料、駐蒙軍の凍傷実験、中国歴史資料館の資料、日本で報じられた数少ない告白等から、広汎な生体解剖の事実を発表したが、医学会は勿論、マスコミも全く取り上げなかった。平和活動家にしても、生体解剖は731部隊だけと認識し、広大な中国占領地で頻繁に行われたことを知る人は少ない。

私は26歳の時、軍医中尉として日本の占領地中国に従軍し、中国人を生体手術演習に使い殺害するという医学犯罪を犯した。1942年（昭和17年）2月1日、中国山西省ルーアン陸軍病院に軍医将校として、拳銃を持ち軍刀を下げ意気揚々と赴任し、中国人を劣等視するは勿論、衛生兵や看護婦を見下していた。赴任し一か月半頃、病院長の軍医中佐から「手術演習に参加」と、何気ない口調で命令されドキリ！生身の体を切り刻むのだ！拒否したい感覚が体内を走ったが、命令であるから従うより仕方なかった。医学生時代「軍医になったら生体解剖をやる」と、聞かされていたが、その時は気味が悪いと思っただけで、非難する感覚は持たなかった。日本のすることは清く、正しく、正義であると教育されていたからだ。

解剖室に向かう足取りは重かったが、皆の前で見苦しい姿を見せまいと、自分自身を励ましていた。解剖室には36師団に所属する各地の陸軍病院から私も含め新米軍医8人、指導軍医2人、衛生兵5人、看護婦2人だ。解剖される被害者は2人、1人は精悍な軍人で縛られたまま泰然たる態度で瞑想していた。

別の一人は中年の農民風で、縛られている両手を解こうと動かしながら、アイヤアイヤと泣き叫んでいた。室内はこの情景を無視して談笑。私も必死に落着いている振りをして談笑に加わっていた。皇軍勝利のための実験材料として切り刻まれるのだ。同情など許さないぞの空気が漂っていた。

麻酔を施し解剖が始まった。盲腸で死ぬ兵が多いので盲腸の摘出演習。腹部に弾丸が当たると腹膜炎で死に至るので、腹を大きく切開いて腸の切断と吻合手術演習。四肢切断演習も行った。気管切開も演習した。気管切開器を喉頭に突き刺すと、空気が混ざった真っ赤な血が噴き出した。胸部を負傷すると気管が詰まるので、習得が必要な演習だった。

手術演習に一時間以上かかった。農民は死に、若い兵士は呼吸をしていたので心臓内注射の練習台にし、息を止めるため空気を注入。それでも死なないので全身麻酔に使った残りを注射し殺し、死体は穴に放り込んでおくと衛生兵に命じた。

私がルーアン陸軍病院にいた3年間に、10人の中国人に五回手術演習したと記憶している。最初は怖る怖る、二度目は落着いて、三度目は新米衛生兵教育と自分から進んで行った。教育用の図譜や模型もあるが、衛生兵に戦地での度胸をつける目的で実施してしまった。何故実施が必要だったか、戦線が拡大し軍医が不足なので、外科以外の医者でも軍医なら否応なしに手術が必要だったし、戦場で手術を補佐する衛生兵の手術に対する知識と経験が日本兵を救うからだ。

生体手術演習は私のいた病院だけではなかった。1942年(昭和17年)5月頃、第一司令部の指示で指導教育が行われ、各地陸軍病院から太原に40人ほどの軍医が集められた。軍医少将の命令で4人の中国人が1人2発ずつ突然腹部を撃たれ演習が始まった。指導の軍医少将が「弾丸を摘出するまでは生かしておけ」と命じたが、経験の少ない私達は強心剤や酸素のない演習なので4人とも死なせてしまった。この演習に手を出さず見学だけの軍医がいた。彼は「前線で行っているので必要はない」と言ったので、私は方々で行われていると察知した。

1945年(昭和20年)3月頃、私は庶務主任になり、軍の機密文書に触れることのできる地位になっていた。北支那方面軍から「戦況は思わしくない。軍医部は熱心に手術演習に励むべし」の機密命令を受け、私は病院長に「年2回4人のを6回に増す」計画書を立案し軍医部に提出したが、この案は敗戦直前の各部隊の移動が激しく実施されなかった。今、思うと悪魔の手先になっていたのである。

このように冷静に細かく調査していくと、生体手術演習は北支那全体で行わ

れていたのである。更に分析すると、参加した軍医は少なくとも1000名を超え、数千の衛生兵、看護婦が生体手術演習に関わっていたのである。

しかし、これだけ大勢の関与者がいるのに誰一人として語らない。何故か？ 恥じてか？ 恐ろしいのか？ 否、信じにくいと思うが、日常忘れて思い出さないのである。犯行を犯すときは「戦争では当たり前」「命令に従っただけ」と割り切り、全く罪悪感を持たないため記憶にすら残っていないのだ。

私は1956年（昭和31年）中国最高人民検察院で起訴免除になり同年7月帰国し、元陸軍病院の同僚も含め一席設けて頂いた時、元軍医の一人がした顔で「湯浅君が戦犯として今日まで中国に抑留されたのは、あの戦争を侵略ではないと言い通したからだ」と発言した。そこで私は「諸君と同じようにコレをしたことを認めたからだ」と、首を切る真似をすると、彼等は真っ青になり団欒から離れ、後向きになり考え込んでしまった。彼等は戦後11年にして始めて「命令に従い」「犯罪を犯して」いたことを思い出したのである。

敗戦は中国山西省太原、帰国組、残留組と自らの意思で二つに別れた。当時中国は政府軍、政府を倒す解放軍、そこへ日本軍と信じられない三ツ巴。日本軍は政府軍と解放軍。政府軍は日本軍と解放軍。解放軍は政府軍と日本軍。まさに三者泥沼状態の戦争であった。政府軍は元日本兵に志願すれば階級を進級させ、優遇すると募集し解放軍と戦わした。憲兵は身の危険を感じ普通の兵に変身帰国。生体実験を悪と認識していた軍医達も、口を閉ざして帰国。日本は米軍空襲で焦土と化し、尚、アメリカ軍に占領されたのを嫌うなどで約2600人が残留志願した。

私は自分の意思で内科医として地域住民の「町医者」として、罪滅ぼしの気持ちもあり中国人に奉仕していた。時々、解放軍との戦闘で負傷し運ばれてきた兵の医療救護にも当たっていた。戦いは3年半に及び解放軍の勝利で終止符。この内戦で元日本兵550人が戦死、1000人が日本へ帰り、私も含め800人がB・C級戦犯として逮捕された。

日本軍は拷問で痛め付け強制的に白状させたが、解放軍は学習で罪状告白の総括をさせ、私は「命令」に忠実な素直な兵隊だと確信していたので、悪いことは何一つしていないと自負していた。「良心に恥じない」へと学習が進み、命令に従った生体実験は「良心に恥ずべき人間の尊厳を犯す重大な戦争犯罪」であると思えるまでになり、日本政府の欺瞞と圧迫により、戦争犯罪を犯したと気付かされ、自分が関与した「手術演習」を包み隠さず坦白（告白）し1951年（昭和26年）中国人に対する残虐行為で刑の判決を獄舎に繋がれ待っていた。

1956年（昭和31年）6月、中国最高人民検察院は元日本軍戦犯全員に

対し驚くべき「不起訴」という寛大な判決を下し全員帰国させた。これは際限ない悲惨な殺戮を食い止めるには、中国人民が範を示すことだ、犯罪に対する裁判にせよ日本人を死刑にしたら、その子孫に仇討ちの気持ちを持たすことになるからと、遠大な思想で不起訴にしたと知らされた。それも有り私は、安保闘争の医療班、小児麻痺生ワクチン輸入闘争など多くの平和運動に関わった。「生体手術演習の証言活動」では右翼から脅迫や妨害も受けるなど、困難を克服して600回以上も講演活動を行い、1991年(平成3年)と1993年(平成5年)の2回、中国の病院跡を訪ね「謝罪鎮魂墓参」をさせて戴いた。

現在平和憲法を改悪して再びおっぴらに戦争の出来る国にしようとしている。憲法9条があって海外派兵も実現させた政府の宣伝表現は、戦前の東洋侵略に用いたのと本質的に変わっていない。これを肌で感じ怖れているのは誠に残念ながら年々減少している『戦争体験者』だけなのである。この危険情勢に際して、隠された侵略戦争の意味を人々に知って貰おうと私は必死である。平和への願いは極めて至難であるが、有意義と考え行動している。

原爆投下

正確ではないが、文意は次のように記憶している。

一、広島に新型爆弾が投下された。兵を屋外に出す時は、白の長そでを着用させて、皮膚面を露出させないこと。

一、兵の脱走、逃亡に十分留意すること。

しばらくして中隊長から命令書を読んだかと思われ、正直に「読みました」と答えると、少し沈黙した後「これにも口外せぬように」と言われた。

私は関東軍第六国境守備隊(中国黒竜江省瑗琿IIあいくん)朝水陣地で、大隊本部へ命令受領に行き、茶封筒に入った通信紙一枚の命令書を受け取り、違反行為であるが、読んでから中隊長に渡した。

内容は簡単な文面なので、

である。上層部は「核」の脅威を知りながら、国民に犠牲を求めたのである。

以後、私は原爆を含む「核」の脅威を追及している一人である。

戦後50年

核の脅威隠し 犠牲求めた軍

豊明市 橋詰 四郎

(無職 69歳)

私は関東軍第六国境守備隊(中国黒竜江省瑗琿IIあいくん)朝水陣地で、大隊本部へ命令受領に行き、茶封筒に入った通信紙一枚の命令書を受け取り、違反行為であるが、読んでから中隊長に渡した。

内容は簡単な文面なので

めに被爆地へ人を集めたの

生死を分かつ数時間

稲葉 迪夫

十九日から第六国境守備隊五中隊にも肉迫特攻出撃命令が下り、既に何人かの戦友が出撃戦死している。我が中隊も甚大な戦死者も出て負傷兵も多く、布陣している丘陵は敵の攻撃で山容が変わり土肌が露出している。私は選抜で二十一日特攻出撃と決まっていた。あと二三日の命である。覚悟は出来ているが、人間決意とか、腹を括るとか、死を覚悟とか、簡単に言うが、実際自分がその瀬戸際に立たされた時は、そんな単純なものではなかった。

明日という時、上官や戦友たちから励ましと、後に続くからと慰めの言葉を掛けられるが、夜が明けたらと思うと、その晩は胸騒ぎで一睡もできず、怖ろしい一夜だった。特別に甘味品や食べ物を貰ったが喉を通らない。死出の旅用となる新品の軍衣袴、褌も新品だか着替える気にならず、ジーンとそれらの品々に目を落とし黙想するのみであった。

黙想していると頭の中は、脈絡のない雑想が入り乱れ走り回り、頭が割れ、胸が引き裂かれるような妄想にかられるのであった。父母、兄弟、親戚の人達、幼馴染み、氏神様の祭り、運動会、故郷の山河などが脳裏を駆け巡るのだ。これはいかんと「お父さん、お母さん迪夫は明日天皇陛下のため死にます。靖国神社に会いに来て下さい」と一人呟き、無理に頭の中に天皇陛下と靖国神社を自分で切り替え押し入れるが、少しすると、お母さんが頭の中の天皇陛下と靖国神社を押し出そうするのだ「お母さんと大声で呼びたい」。

北満の夏の朝は早い、弾薬箱の空箱に十キロの爆薬を詰め、瞬発信管に誘導索を取り付け、背負い紐で背中に固定し三時半に陣地出撃。最前線の歩兵壕へ辿り着く。決別の挨拶をしたが、誰にしているのか、相手が誰なのか、全然顔が見えなかった「稲葉候補生、肉迫攻撃に出発します！」挙手の礼を最後に壕を蹴って飛び出す。飛び出した途端、後ろから中隊長が大声で「稲葉伏せろ、少し顔を上げろ、前方の白旗が見えるか」中隊長だけが壕から顔を出して『死』に向かう私を見送ってくれ敵陣の白旗を発見したのだった。白旗を大きく振りながらソ連軍将校が来るではないか、オーイ日本が勝ったぞ！全員壕から飛び出て天皇陛下万歳を三唱し。その後はシベリア、アラチカ炭坑でロシアの囚人と一緒に四年間強制労働をさせられた。

特攻隊員は私のような気持ちで死んでいったと思う『死者には言葉がない』体験し生き残った私が『言葉のない死者の代弁者』にならなくてはと思う。戦争は愚かなことだと。

血液を提供した報酬

橋詰 四郎

昭和20年8月9日早朝、ソ連軍の攻撃で日ソ戦が始り、関東軍第六国境守備隊は9日から強力なソ連戦車軍団と死闘を繰返し、一進一退の攻防戦を展開。敵戦車軍団の陣地侵入を阻止していた。21日、敵陣よりソ連軍将校が大きな白旗を振りながら来た。私達は「日本が勝ったぞ！天皇陛下万歳！」と踊り狂った。ソ連軍将校は8月15日、天皇が直接、戦争の負けをラジオで全世界向け放送したと告げた。私達は武装解除され捕虜となり、日本へ帰すと言われ夏服のまま、中央シベリアの工業都市クラスノヤルスクへ拉致連行された。

収容所は広い蒸気機関車修理工場の敷地内に、周囲を高い塀で囲んだ囚人用半地下の建物、四隅の望楼に24時間ソ連兵が監視し、塀3メートル内に入ると射殺。入所した日、射殺され見せしめ犠牲者が出た。全裸で陰毛を綺麗に剃られ、ロシア女医に尻を向けて立つ、女医は捕虜の尻の肉を指で摘み、肉の厚さで1級から4級に振り分け、4級はOK（オーカー）で入院、3級は軽労働と分類し、屠殺場へ売られる家畜と同じ扱いをされた。医者ノルマは入院者を減らし働かすことだから、死ぬ犠牲者は3級者に集中した。

私は旋盤技術者として、蒸気機関車ボイラー修理工場旋盤を任せられ、命拾いをする。何故って、世界一の寒冷地シベリアで、私の職場？は屋根付き暖房付きの屋内作業だから、日本で習得した技術でソ連の戦後復興に貢献している裏切者として、屋外重労働捕虜から冷たい目で見られていた。夏服の捕虜にアツと言う間に氷点下30〜40度の冬将軍が襲いかかり、日本人の誰もが体験経験したことのない、酷寒・飢餓・重労働・疫病で、死ぬ順番は体力のない者と補充兵からで、ドミノ倒しのように死に、最初の冬は死亡者名簿の作成を禁じ「死者ゼロ」扱いの処置を強要させられた。

入浴も石鹸も着替えも歯磨もなく、虱と南京虫が捕虜に襲いかかり、虱が媒介する発疹チフスは血便を垂れ流し、着替えもなく糞まみれで死ぬ。死ぬと汚れた真っ黒なシャツと痩せ衰えた垢だらけの体から生血を求め虱の大移動が始まる。身に付けていた衣服を全部剥ぎ取り丸裸にし、告別も葬儀もさせず小屋に積み、トラック1台分になると何処かへ運ばれ、明日は我身と泣く暇などはなく、死んで早く楽になった奴を羨ましく思えたほどだ。日本では家族が陰膳で無事を祈っているのに、ここは祈りの届かぬ地獄そのものであった。

キツネと渾名を付けたロシア人女医が通訳を通し、日本人を救いたい薬もない、頼みは栄養失調の君達の血液だけだ、血液型を調べる薬もないからO型血液を提供してくれたらソ連軍に話し、三日間休まずと言う。私は提供し体力低下で死ぬば過酷なノルマから解放され、綺麗な死に方が出来る。と考えた。

同室の戦友達は「お前も死ぬぞ」と、引止めたが、「誰でもよい、日本へ帰れたら俺の死に様をおふくろに伝えてくれ」と医務室へ行く。女医はテーブルに顔を伏せ肩をふるわせ嗚咽していた「今、一人死んだ」と。日本人の死に泣いてくれているロシア女性の涙を見ても、私はコンクリートより硬い凍土を掘らされる、生き残り者に同情をしていた。

血液提供を申し出ると女医の顔は輝き、見たこともない太い注射器を出した。私は200CCだと思っていたので、中程の200の目盛りを指し「ここまでか」女医は一番上の400の目盛りを指し「ここまで」、ソ連はヨーロッパ圏で400CCだと判る。今思うと面白い、このとき私は何故か倍なら「死ぬ確率も倍になる」と自分自身に言い聞かせていた。名前を聞くので「ハシツメ」とゆっくり教える、女医は「クッズーミ・クッズーミ」と繰り返しながら病室へ。どんな奴に俺の血が生き継げられるのだろうか。

採血後、収容所で横になっていると、女医が「クッズーミ」を連呼し私を探し、米・砂糖・肉・ラードを各300グラムづつ置いていった。捕虜になってから1年、初めて出会った貴重食品ばかりだ。戦友達は少しづつ食べよと助言したが、残して死ぬのは嫌だ一度に全部と決め、戦友達が全部飯盒に入れ煮てくれた。蓋を取ると表面に油がキラキラ浮き「ヒマシ油」と思った瞬間、食欲がなくなった。「うまい、うまい」と言う戦友7人の声を聞きながら、一口も食べずふてくされてしまう。

献血2日目、職場のロシア人数人から見舞品だと、食べ物差し入れが届けられた。死にかけの戦友を助けるため、自分の血を400CCプレゼントしたら、今度は私が死にかけていると伝わっているらしいのだ。さすがの戦友達もこの差入れ食物にはオネダリはしなかった。献血後も相手が死んだのか助かったのか判らなかった、戦友達はお礼に来ないから献血は無駄だったと決め、私が死ななかったことを「ヨシ」としてくれた。

昭和22年春頃、職場の監督（ガマンジェル）が秘密だと前置きして近く帰れるかもと。日本人捕虜がロシア人囚人と交代するというのだ。日本人は技術も高く勤勉だし、政治犯なら別だが悪者囚人なら嫌だが仕方ないと話した。そして、地獄のシベリアから生きて日本に帰れた。明日それぞれの故郷に帰る前夜、「輸血のお陰で帰れました」と挨拶された。その後一度の文通もなく歳月が流れ昭和62年、私は初めて戦友会の通知を受け出席し、戦友から「奴」が岡山で世帯を持っていると知らされた。戦友は「奴」の非礼を非難したが、私は血液を提供したことで日本人の死に泣いてくれたロシア人に出逢えたし、私の身をも心配してくれたロシア人とも触れ会えた。スパシーボー!!ありがとう。もし死んでいたらシベリア版コルベさん?だったのにと無念。*この体験談は簡潔にまとめ朝日新聞社発行出版単行本「食べる」に掲載されています*

死自天誅、う十八分所

井上 龍助

北満、徒溝子で昭和20年8月21日（1945）ソ連軍より武装解除された関東軍第六国境守備隊は、東京ダモイ（東京⇨日本へ帰る）とソ連兵の監視を受けながら徒歩で野宿しつつ南下し、日本に少しは近くなった孫呉へ連行された。孫呉では既に降伏した日本兵が大勢集められ、千人から千五百人単位に編成され、日本へ帰すと貨車に乗せられ北上（日本から遠のく）終点黒河から黒竜江（アムール川）を船で渡り、ソ連領ブラゴウエシチェンスク十八分所に収容され、船着き場で満州から略奪し、ソ連へ運び込む膨大な物資の荷揚げ作業をさせられた。対岸の黒河でも蟻のように働く人が船に荷物を積み込む姿が見え、我々の労働力は莫大なものであったと思う。

冬將軍とはよく言ったもので秋はなくアツと言う間に冬が来た。着のみ着の儘の夏服の上に穀類や大豆など豆類を入れてあった麻袋を、衣服替わりに頭から、胴や足にも巻き付け、足踏みをして寒さを追い払おうと必死だった。まるで麻袋が蠢いているような一団であった。朝、仕事に行くため並ぶと、ライ麦を練って蒸して団子のようにした食べ物を二個二食分受けとる。一食分は軽く一握りの量しかなく、ソ連兵は整列した我々の人員を数えるのに手間がかかり、暇とっている間に昼の分も食べてしまう。船底や棧橋に袋からこぼれ落ちた大豆や食べれる物を拾い、齧りながら過ごす作業は実に死ぬ思いであった。

その頃になると発熱する人が出始め、恐ろしい早さで収容所全般に蔓延し、作業不能になってしまい、三級に指定された軽労働者のする所内雑役が我々に回ってきた。毎日1200人分の炊事に使う水は石油缶に針金で取っ手をつけ、2人で2缶を棒で担いでアムール川の支流ゼーヤ川で汲んで、日に何回も運ぶのである。缶の回りも凍結し水滴が服にかかっても濡れず、丸味の水溜りとなつて付着した。凍ってしまうのでこぼれることはない、貴重な水なので炊事だけに使用していた。水汲みは三級軽労働の仕事だが実際は、50人が2人1組で1回2缶ずつ何往復もしなければならぬ重労働のノルマなのである。

発疹チフスの蔓延は、虱の繁殖伝播による伝染病であるが、この酷寒の寒さの中であれ程繁殖したのは、入浴も洗濯もさせなかった不潔な環境と人間の体温であった。屋外でシャツを脱ぎバタバタはたくと凍土の上に無数の虱が落ちていった。これが作業から帰ってからの毎日の大仕事であった。発病して寝込むと虱に吸血されっぱなしとなる。発熱した人の体温は虱にとって熱過ぎるのか、服の外に這いで来て襟首などへ生地が見えないほど卵を生み付け、病が少しでも回復して体温が下がるとまた体の中へ入っていく、そして死亡し血液の流れが止まり体温が下がると、隣の人へと移動する。この虱の大移動は体験目撃した人でないと信じて貰えないと思う。

トイレは屋外に収容所から100メートル離れた所に、大穴を掘り厚い板を二枚渡し何列にもなっている。1200人使用の巨大屋外ポットン式で、日本のように囲いはなく厳冬の吹き晒しに尻を晒すのだ。病人は到底ここまで行けないので、屋内の廊下我便槽を置くことにした。照明は電気ではなく石油ランプ、全体的に発病した時はノルマも低下し、灯す石油も減らされ、昼さえ暗い室内は一層暗くなり、熱に浮かされ、呻き、叫び、脳症を起こして暴れるなどの騒音は生き地獄さながらの修羅場であった。

廊下の便槽まで行けず寝たまま排便する者も多く、汚した衣服を取り替える衣服もなく、ズボンの前を開くと腹の辺りまで汚れ、股と腰の付け根の襷に添って便が埋まっている。40度もある体温を下げるのに氷枕もないので、毒ガス用マスクのゴムの部分を裁断して氷を包み、冷やしたりした。高熱なので水を飲みたがるが、飲まずと死ぬので少し唇を濡らす程度だ「腹一杯水を飲んだら死んでもいい」と言っ、氷枕の水を飲んで死んだ人がいた。一日何十人もの死亡者が出る修羅場で、死に際のか細い声、笑い声、泣き声、悲痛な叫び、そして最後に母を呼んで。それはその場にいた者以外には理解できないだろう。一人でも助けて一緒に日本へ帰りたい気持ちで頑張ったが、昼夜を徹してする看護にも体力の限界があった。この気持ちは日ソ戦で肉迫攻撃に立ち向かったような緊張と責任にさいなまれた。

死ぬと衣服を全部脱がせ屋外に並べる。冷凍の遺体は瘦せて胸は洗濯板同様に顔はみな瓢箪型になり、体は棒杭のようで体重は軽かった。薪を積み上げるように死体堆積の山を2つ、二頭曳きの四輪馬車二台と3名のソ連兵が来た。私達は馬車に材木を積みように一台に30体を積み上げ、運ぶ振動で遺体は落ちるので、ソ連兵が遺体を足で踏み付けながらロープで縛った。別の一台に27体。この日は57人だった。積み終わるとソ連兵は遺体の上に立ち乗りの姿勢で手綱を取り、ギーギーと雪の軋む音を立てながら出ていった。このようにして僅か4か月の間に400人以上がアッと言う間に死んでいった。

また、余りにも死者が多かった翌日は、馬車で運ぶのは追いつかないと思ったのか、ソ連軍は飲料水にしているゼーヤ川の結氷した氷を、バールで穴を開け水葬と称して流せと命令してきた。そのとき樺だけの遺体が一体あったのでそのまま流そうとしたら、ソ連軍兵士が自動小銃を発砲し、手真似で全部取れて脅迫してきた。仕方無く二人で脱がせようしたが、排便が凍り皮膚に密着していて尻の皮膚まで剥がれてきた。凍っている遺体は、運んだり動かして互いに当たったり、腕や足が折れる時は金属音がする。

全員が一丸となって根気良く、日数をかけて何回も衣服を水汲の石油缶で、熱湯を沸かし煮た甲斐あって、昭和21年3月頃(1946)ようやく発疹チフスは下火になり、死亡者が減りはじめたころ検診というより、尻肉検査があった。今度の検査医は上級軍医少佐と前触れが凄かったが、女なので驚いた。

聴診器は一本のパイプの両端にラッパ型のゴムが接合してあり、医者の方と患者の胸に当てるようだが、聴診器は使わず売買する家畜と同じのように、今迄通り尻の肉を摘むのだ。後で分かったのは、この検診は働けない体力になり、そのうち死ぬような病弱者を選び出し、ソ連から黒河へ逆送するためであった。まさに「働かざるものは食うべからず」の国そのもので、元気な日本兵をこのようにしておいて、我々は戦争以上の戦いに振り回されていたのであった。

逆送組は4級の入院者からトラックに積み重ねられて出発して行った。次は国際法に抵触している18歳未満の若年層を徒歩でソ連兵監視付きで出発した。ソ連は満州で日本人男子を無差別に男狩りして、労働力として連行していたのだ。若年層の殆どは満蒙開拓青少年義勇軍で、農家の長男以外の男子を集め集団農業に当たらせていたのであった。その次に尻肉摘みで3級と診断された者達で、私も含まれていた。回復者が増え始めた頃突然私は体調が崩れ、発熱が続いたが入院などさせて貰えず、回復した病弱者の一人が懸命に看護してくれていた。出発前の所持品検査は着ている衣服の枚数まで制限され、2枚着ていると1枚脱がされ没収。このようにして更に着のみの儘にされ、病人ばかりの集団は徒歩で出発した。ソ連兵がダバイダバイ（急げ急げ）と叫んでも、とぼとぼとしか歩けぬのだ、皆早く撃ち殺され楽になりたいと思っているのだ。

荷揚げに通う大通りに出て驚いた。道の両側に時々日本兵の遺体が転がっている。結氷している黒竜江を徒歩で渡ったが、力尽きた行路死は黒竜江の水の上にもあった。私は介護してくれる戦友の力を借りて、目的地でない目的地黒河に辿り着くことができた。黒河で私達は政府軍の監視下になったが、八路軍の攻撃で敗走。主客転倒のど真ん中に置かれ、私達日本人の命を握っているのは政情混沌として不明なのだ。ソ連で働けぬ弱者は黒竜江を徒歩で渡れる内にとシベリア全土から、その数は五千人以上に膨れ上がり、まだまだ増えると言ふのだ。そして力尽きた者は行路死へと、何処の誰かは一切不明である。

孫呉で別れた菅井に再会できた。菅井は第六国境守備隊の主力と共にブラゴウエシチェンスクから東京ダモイと言われ、野宿しながら畑で馬鈴薯収穫作業をして進む内、霜が降り、雪が舞い夜は氷点下になり、野宿なので死者が出る。死ぬと放置したまま次の畑で薯掘り、その繰り返しを1か月してアラチカ炭坑に到着した時は1/3が死に。この仕打ちにはソ連兵を殺した戦闘部隊への報復行為でダモイでなく、囚人と一緒に炭坑で働かされ病気になる逆送されたと。

そして3か月後の6月、私は約450名で八路軍の監視兵8名を撲殺し日本へ向け脱走した「黒河事件」を発生させた。菅井も含め半数は捕われ銃殺された「黒河事件」は『緑区戦時体験記録集』3集II橋詰。11集II西岡、上村。13集II山岡等が寄稿している。終りに平和憲法を守れ！と絶叫し筆を置く。

*寄稿者井上龍助氏は、日ソ戦、シベリア、黒河事件の死亡者の人々を供養するため自宅の庭に観音堂を建立し、日夜供養している。橋詰追記。

映画「日本の青空」の主人公

鈴木安蔵先生の素顔と私

中村幸夫

みなさんは映画「日本の青空」をご覧になって「憲法は押しつけではなかった。憲法の根本部分は日本人の手で作られたのだ」と、感激されたと思います。

一本の映画が護憲活動の確かな自信となり、九条の会の活動は一層ひろがり、高まっています。

みなさんは「日本の青空」に現れた鈴木安蔵先生(以下「鈴木先生」「先生」)をどう思われますか。日本国憲法の「下敷き」を作り上げた「憲法研究会」の事実上の事務局長として活躍した鈴木先生は、その後も民主主義の先駆者として、さつそうとして行動されたと思うでしょう。

ところが先生の極めて進歩的な思想は、当時の吉田内閣の保守的な性格とは一致するものではなく、政府に迎え入れられることはありませんでした。

憲法制定後、先生は参議院内に設けられた憲法普及協会の一メンバーとして全国を歩かれたという略歴を知るだけです。また大学の教壇に立つこともなく、在野の学者として本領を発揮していただけでした。

その先生が静岡大学・文理学部教授として、初めて大学に籍を置くことになったのは私が三年生の時・昭和二十六(一九五二)年でした。その一方では他の大学からも誘われており、むしろこの方の話が先行していたようです。いわば静かな争奪戦が繰り広げられていました。

静大ではまず進歩的な教授の中から先生を推す声がおこり、大学からも正式に就任を要請しましたが、前記大学との絡みがあつて色よい返事がないまま、講演会を開催しました。多くの教授も出席して、就任特別講義の形で先生に礼をつくしたわけです。

その夜のこと、学生寮で入浴中の先生を見つけた学生が、先生の背を流しながら話しかけた。「どうですか、先生、静岡に来て私たちと付き合っていただけませんか」。この耳元のささやきが、さしもの先生の心を動かしたという伝説がある。

しかし、それはあくまでも伝説で真相はこうだ。その夏休みが終わる頃、学生自治会の委員長や法学専攻の数人が東京・世田谷の先生宅を訪れ、こもこも

熱意を語って静大就任をお願いし、さしもの先生も旧制高校の面影を残す静大の校舎と、それに勝る学生の熱意と純心に感激され、その場で同意された。

とにかく先生を招いたのは学生の力で、大学はその後の手続き事務をしたにすぎない。

こうして鈴木先生は生まれて初めて教鞭をとることになった。第一回講義に出席し、合併教室を埋め尽くした学生の一人だったことに、今さらのように感激を覚える。

「日本の青空」でみる先生は、京都大学時代には「学連事件」による治安維持法違反で逮捕・投獄されるなど数々の武勇伝の持ち主である。

全学連全盛期、そして進歩的文化人大歓迎の時代だった。学生を前にして戦前の活動の一端でも語れば、満場の拍手喝さいは請け合いだった。

ところが先生の講義は、しかめっ面で講義案をとつとつと読み進むという明治人間の典型だった。学問以外のことで、学生の人気を得ようとは考えてはいなかったようだ。

その頃、国民に最も欠けていたのは人権認識だった。したがって大学の教養科目「憲法概論」は基本的人権を中心テーマとされた。もちろん憲法講義だから三権分立・国会の最高機関制なども熱っぽく語られたが、基本的人権の印象が最も強い。(なお翌年は専攻科目「政治学原論」を受講)

徹頭徹尾、先生は講義中、いや私的な機会でも戦前の学生運動・戦後の憲法制定期の活動については全くふれることがなかった。進歩的文化人がありもしない戦前の武勇伝を語って、マスコミの寵児になった時代にある。

私には、それにもまして先生の硬骨にふれた苦い思い出がある。

昭和二十七(一九五二)年十月一日の総選挙直前のことだった。ご承知のように同年四月二十八日、わが国はサンフランシスコ条約の発効により独立国になった。前年までは「全面講和か単独講和か」で世論は二分され、その中を占領軍の後押しで、なんとか単独講和にこぎつけたイキサツがある。だからどちらが真に国民の意思なのか問われた総選挙だった。

学生自治会は「全面講和派・再軍備反対派を一人でも多く国会へ」という方針を学生大会の圧倒的多数で可決し、寮生大会でも自治会の中心部隊として活動する決議をした。

が、困ったことが持ち上がった。署名運動の戸別訪問をしようとしても試験勉強が障害になってくる。選挙は前期試験の初日だったのだ。どんなに全面講和派といっても、試験勉強をサボるわけにはいかず、理科生の中から試験中止または試験延期の動議が上がってきた。

そこで各寮ごとに先生たちを割り振り、陳情に回ることになった。道理は学生側にある。若手の助教授や講師クラスは簡単に同意してくれた。問題は古手の教授陣だ。なんと私は、その中心の鈴木先生を説得するチームのキャップにされてしまった。一年生、とりわけ理科生は全寮コンパでの自由闊達なスピーチしか知らない。「先生は全面講和派だからアッサリ承諾してくれるだろう。何しろ中村さんがついていてくれる」と安心してガヤガヤとついてくる。

私は無理をしても講義には出席していたので、いざという先生は人が変わったように堅苦しくなることを知っていた。そこで「ことによると試験中止はできないかもしれないが、延期なら大丈夫」と読んで、内心作戦を考えていた。宿舎の玄関に現れた先生は、私の意見を聞いた後、「私個人としては全面講和派である。諸君の主張を諒とするにヤブサカではない」（賛成と率直にいえばいいのにそこは明治人間である。）

「しかし、それは私個人の考えであって、大学の運営に影響させるべきではないと信じる。したがって諸君の願いは聞き入れるわけにはいかない。試験は既定方針どおり実施する」この一言である。完全拒否とは毛頭考えてはいないから、あわてて「それでも先生、今度の選挙は・・・」「それは十分わかっていゝる。しかし大学の既定方針は変えるわけにはいかない」

この押し問答を一時間ほど繰り返した後、すごすごと引き返すしかなかった。帰り道では「なんて分からず屋なんだろう。つける薬はないものか」と、のしりたいたい気分だったが、あらためてじっくり考えてみた。学問のあり方・大学の権威についての先生の観念の根源は、大学を中退し、つづく獄中にあつて「科学としての憲法学」を追求した苦闘の中にあるのではないか。それを思わぬ形で私たちに見せてくれたのではないかと。

そう思えてきたのである。私はそれを後輩たちに語ってやれるほど考えをまとめる力がなかったことが、今でも悔やまれる。

さて後日談。昨年「日本の青空」上映運動の席上、この話を紹介すると、鈴木ゼミナールの一番弟子・内山弁護士によると「選挙の後、先生は変わられませんでしたよ」とのことだった。

自治会のデモに参加するためゼミ欠席を事前に知らせたところ

「そうか、それは困った。デモ参加は表現の自由の問題で、基本的人権を説く私が表現の自由を否定するわけにはいかない。そこで、どうだろう。ゼミはデモから帰ってからグラウンドでやろう。なに、夕方で暗くなる？それならローソクをたてればいい。」

「そんなことで円座の真ん中にローソクを立てた野外ゼミを何回かやりましたよ」

憲法特集

内山弁護士が一年生として入寮した時の先輩同室者が私で、その時以来の愚兄賢弟なのである。

野外ゼミの話を聞いて、ハハ、先生も私の陳情が思いのほか、こたえたんだな。そうしてみるとあの夜の勝負、表向きは完敗だったが、内実は引き分けか！そんな気がしてきた。

そこである。「日本の青空」上映資金に内山弁護士は十万円を出した時、その額を横にみて法学専攻でもなく、引き分け勝負の私は五万円とした次第。先生、これでアイコですよ。

でも先生！九条の会では、学友の誰にも負けぬくらい頑張っていますよ。

無職 橋詰 四郎

(愛知県豊明市 81歳)

我が国の人口で、昭和生

まれが1億人を割り、高校

生は平成生まれ年代になり

ました。「昭和」が次第に

遠のいていきます。そこで

「昭和の日」「憲法記念

日」「みどりの日」「こど

もの日」と続く一連の休日

を「平和憲法感謝デー」と

することを提案します。

昭和の時代到大戦争がヨ

ーロッパとアジアであり、

アジアでは日本が多大な被

害を与え、莫大な犠牲者を

出しました。そして、日本

は平和憲法を

制定し、戦争

を禁じまし

た。特に9条

は「世界の

宝」と、高く

評価されてい

ます。

憲法を守ろうという私の

前に、日本がアメリカと戦

争して負けたことも知らな

い大学生が現れています。

政府与党が推進している学

校教育で、戦争の悲惨さを

教えない成果でしょう。

戦争体験を持つ私たち

は、孫、ひ孫を守るため、

もう一度、声を出しましよ

う。

今の平和を守るために

も、「昭和の日」から「こ

どもの日」までを「平和憲

法感謝デー」とする運動を

展開しようではありません

か。

憲法感謝デー GWに制定を

戦後 日本兵捕虜なせ脱走

中国「黒河事件」真相解明へ

元兵士ら体験発表会

戦争が終わった翌年の昭和二十一年六月、黒竜江を挟んでソ連と国境を接する中国最北端の町黒河（こくわ）で、捕虜の日本兵多数が脱走、取り残された兵が中国兵に殺されたとされる「黒河事件」の真相を解明しようと、元兵士らがこのほど宝塚市内で体験の発表会を開い

昭和21年6月

た。事件の背景には当時の中国の共産党と国民党の対立も見え隠れするが、詳しいいきさつや死者、行方不明者の数などいまだにはっきりしていない。元兵士らは一戦いが終わったのにまだ多くの中国、日本人が殺されたのかと、当時の証言を集め、秘められた終戦史の解明を急ぐようにしている。

真相解明には当時、黒河にいた日本軍第三三五旅団の元兵士でつくる戦友会の「壕壕（あゐ）ぐべ」中国の地名（会へ林）修会長、三千百人があたる。宝塚での体験記録発表会には約八十人が参加し、収容所の様子、脱出行動、逃走ルート、残された者の処遇など十六項目を話し合った。一十三人ずつが組の糸をほぐし、日本の兵士が黒河攻撃に加わったいきさつや逃げる途中に射殺された人数、

処刑の様子などが明らかになった。壕壕会によると、これまでに伝えられている事件の概略はこうだ。終戦で武装解除された二三五旅団の兵士約八百人は、八路軍（中国共産党系の軍隊）が管理する黒河の収容所で帰国命令を待っていた。六月十八日ごろ、八路軍と対立していた国民党系とみられる部隊が黒河を攻撃。いったんは八路軍が追い返した



黒河事件の真相を求め、記憶をたどる元兵士ら
＝宝塚市栄町3丁目の宝塚グランドホテルで

が、攻撃をしかけた部隊が残した遺体の中に日本兵がまじっていた。身の危険を感じた兵士らが二十日午前零時ごろ、収容所の警備兵数人を殺して脱走。おとに残された日本兵らが殺された。

元兵士の初めての話し合いのなかで、一部の日本兵が黒河攻撃に加わったいきさつは、黒河近くの日本軍陣地へ砲撃探しのため日本兵七、八人を連れて行った八路軍兵士が戻り、国民

党に協力すれば帰国できるとほめかしたため、攻撃を手伝ったらしいと語った。脱走したのは四百五十人とも五百人ともい、特定できなかったが、途中、二つの集団に分かれたあと、ぼろぼろになって南下した。黒河に残った二三百人は、板壁に囲まれ鉄格子のある建物に閉じ込められ、約三週間、毎日十二人ずつが連れ出され、戻って来たかった。四人す

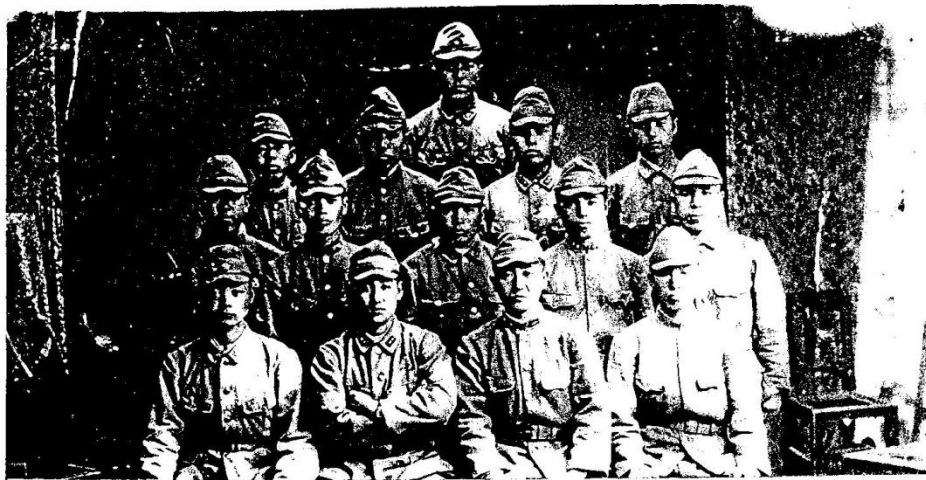


かまり、いまだに生きていないとをされたと言っているものはない。ただ、だが、どこでどのようにして死んだかを明らかにし、遺体を収めてやりたいという。今後、寺田さんら約二十人はこの委員会をつくり、新しい証言の掘り起こしなどをすすめる。

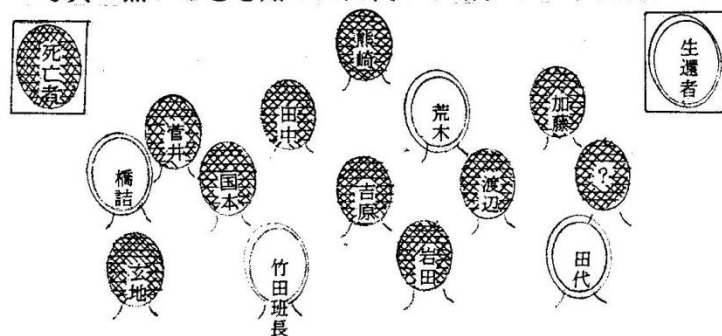
藤原彰・元二橋大教授（日本現代史）の話 黒河で集団脱走があったことは分かっているが、資料がなく、詳しい内容は明らかになっていない。いわば知られざる事件であり、元兵士の証言は終戦史のなぞを解く点で意義があるだろう。中国側の資料も集め、検証を深めてほしい。

朝日新聞大阪本 版

1988年(昭和63年)11月1日



関東軍第六国境守備隊歩兵10中隊擲弾筒班（死亡確認は田代）
写真は昭和20年（1945）5月写す（橋詰19歳）
写真の無いことを知った田代から昭和61年頂戴する。



熊崎=昭和20年6月チチハルかハルピンの貧民窟で暗殺される。
荒木=日ソ戦負傷第一号。8月9日ソ連戦車軍団と死闘中。シベリアから生還し傷痍軍人手当申請し却下され、昭和61年橋詰の「負傷現認証明書」添付し再申請も却下。
菅井=逆送組・昭和21年6月21日、黒河事件で虐殺される。
国本=私の隣で戦死。
菅井、国本の母は、息子の『死』を認めず。昭和34年（1959）未帰還者特別法で旧満国の13,000人を含むに「戦時死亡宣告」を行い戸籍から抹消してしまう。



昭和19年（1944年）7月現役入隊に写す。19歳
下段神州から我ニまでは写真の裏面に書き残し出征す 二男三男共軍隊

神州生享廿年
五尺軀大君捧
豈怖足米英鬼
悠久大義活悦
我ニ逢イタクバ靖国へ
我が魂靖国ニ常ニ在リ
罪罪と九月囚われの雪
舞い始む
万物は凍てて二度目の
冬も生く
御免なさいと言うだけに
行くヒロシマへ
キョウアメ アスハレ

軍 国 の 母
昭和12年(1937年)

一 心おきなく 国のため
名譽の戦死 頼むぞと
泪も見せず 励まして
我が子を送る 朝の駅

二 散れよ若木の 桜花
男と生まれ 戦場に
銃剣執るも 大君のため
日本男子の 本懐ぞ

三 生きて還ると 思うなよ
白木の柩が 届いたら
でかした我が子 天晴と
お前を母は 褒めてやる

皇 国 の 母
昭和13年(1938年)

一 歓呼の声や 旗の波
あとは頼むの あの声よ
これが最後の 戦地の便り
今日も遠くで ラッパの音

二 想えばあの日は 雨だった
坊やは背で スヤスヤと
旗を枕に ねむっていたが
頬に波だが 光ってた

三 ご無事のお還り 待ちますと
言えばあなたは 雄々しくも
今度逢う日は 来年四月
靖国神社の 花の下

月 月 火 水 木 金 金
昭和15年(1940年)

一 朝だ夜明けだ 潮の息吹
ぐんと吸い込む 銅色の
胸に若さの 漲る誇り
海の男の 艦隊勤務
月 月 火 水 木 金 金

二 どんとぶつかる 怒濤の唄に
ゆれる釣床 今宵の夢は
明日の戦の この腕試し
海の男の 艦隊勤務
月 月 火 水 木 金 金

嗚呼神風特別攻撃隊
昭和20年(1945年)

一 無念の齒がみ こらえつつ
待ちに待ちたる 決戦ぞ
今こそ 敵を屠らんと
奮い起ちたる 若桜

二 この一戦に 勝たざれば
祖国のゆくて いかならん
撃滅せよの 命うけし
神風特別 攻撃隊

三 送るも征くも 今生の
別れと知れど 微笑みて
爆音高く 基地を蹴る
ああ神鷲の 肉弾行

空 の 神 兵

一 藍より蒼き 大空に 大空に
たちまち開く百千の

真白き薔薇の花模様
見よ落下傘 空に降り
見よ落下傘 空を征く
見よ落下傘 空を征く

二 世紀の華よ 落下傘 落下傘
その純白に赤き血を
捧げて悔いぬ奇襲隊
この青空も 敵の空
この山河も敵の陣
この山河も敵の陣

三 讃えよ空の 神兵を 神兵を
肉弾粉と砕くとも
撃ちてしまぬ大和魂
わが丈夫は 天降る
わが皇軍は 天降る
わが皇軍は 天降る

出征兵士を送る歌

1 わが大君に召されたる
生命映えある朝ぼらけ
たたえて送る一億の
歓呼は高く天を衝く
いざ征けつわもの
日本男子

九段の母
昭和十四年
(1939年)

一 上野の駅から
九段まで
勝手知らない
じれったさ
杖を頼りに
一日がかり
せがれ来たぞや
逢いに来た

二 空を衝くよな
大鳥居
こんな立派な
おやしるに
神と祀られ
もつたいなさよ
母は泣けます
嬉しさに

三 萬が鷹の子
生んだ様で
今じゃ果報が
身に余る
金鶏勲章が
見せたいばかり
逢いに来たぞや
九段坂

2 ああ万世の大君に
水漬き草むす忠烈の
誓い致さん秋到る
勇ましいかなこの首途
いざ征けつわもの
日本男子

3 輝く御旗先立てて
越ゆる勝利の幾山河
無敵日本の武勲を
世界に示すときぞ今
いざ征けつわもの
日本男子

歌が戦争を美化し国民を洗脳するのに利用されました

編集後記

戦争が終わって六三年が経過し、戦争体験者が減少しつつある中、戦争体験を「語る」でなく、『語り継いで』いる中学生諸君により記録集発行ができたことに感謝しています。

少しづつ、確実に戦争のできる国づくりが進められています。昨年五月一四日、憲法を改正できるように「国民投票法」が決まり、二年後に施行されようとしています。

平成一五年一二月から自衛隊がイラクへ派兵され、今年四月一七日、名古屋高裁は自衛隊のイラクでの活動の一部を違憲と判決を下しましたが、改める気配すらありません。

公務員登用試験で「日本国憲法を尊守します」の誓約書に署名捺印し、めでたく合格された公務員諸兄姉のみなさんに、誓約書を守る行為行動をお願いしますと、呼び掛けましょう。

戦争は方法を選ばず相手国を降参させ、戦争犯罪者を出させた国が勝ちになる戦いです。憲法を守りますと署名捺印した人達と一緒に「世界の宝」日本の「九条」を守りましょう。

この小冊子が一助になることを願って、平和のために。

戦時体験記録集(第一五集)

編集・印刷・発行 戦争体験を語り継ぐ会

発行年月日 平成二〇年七月二六日

発行部数 百五十部

この小冊子は全頁再生紙（古紙100%）を使用しています